



TITLE:

中國古代の木材について

AUTHOR(S):

杉本, 憲司

CITATION:

杉本, 憲司. 中國古代の木材について. 東方學報 1974, 46: 83-125

ISSUE DATE:

1974-03-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/66515>

RIGHT:

中國古代の木材について

杉 本 憲 司

一 はじめに

人間生活において木材のもっている位置が非常に重要であることは、今日の日常生活からも充分にうかがい知ることができ
る。大きいものは建築木材から、小さいものは日常に使用する品物にいたるまでそれぞれのものに最適の木材を使用しようと
努力している。たとえば家屋の棟木には黒松がよいとか、机には黒檀がよいとかいわれているごとく、中國でも古くから適材
適所がいわれていた。潜夫論卷六相列に、

猶萬物之有種類、材木之有常宜、巧匠因象、各有所授、曲者宜爲輿、檀宜作輻、榆宜作轂、此其正法通率也、
とあつて、車の材料である木材についてのべている。このようにそれぞれの用途に應じて木材を求めることから、木材の産地
が生れ、木材の流通が行われるようになってきた。新語卷下資質をみると、

質美者以通爲貴、才良者以顯爲能、何以言之、夫梗枿豫章天下之名木、生於深山之中、産於溪谷之傍、立則爲太山衆木之
宗、仆則爲萬世之用、浮於山水之流、出於冥冥之野、因江河之道而達於京師之下、因於斧斤之功、舒其文彩之好、精捍直
理、密緻博通、虫蝟不能穿、水濕不能傷、在高柔軟、入地堅彊、無膏澤而光潤生、不尅畫而文章成、上爲帝王之御物、下
則賜公卿、

とあって、梗・枅・豫章といわれる樟科の木材が天下の名木であって、具體的な地名はないがその産地と流通の様子がわかる。この小論ではこの問題を考えていく基礎的な資料としての考古學的遺物の中での木製品がいかなる種類の木からつくられていたかを検討し、また一方、文獻にみえる木製品の材料についての史料を提供していきたい。考古學遺物中、木製品のしめる量は他の陶器、金屬品に比較して少く、また出土してもその材質まで言及した報告が少く、言及していても科學的検査をうけて正確に木材の名稱を確定しているものは極くわずかで資料不足の感はまぬがれない。しかしできる限りの資料から木材の產地、流通等の問題についても若干の考察を加え、中國古代で山林のもっていた意義について考えてみたい。⁽¹⁾

二 木材についての資料

木材を使用したり利用したりした器物は非常に多くあるが、これらを建造物、槨・棺等、木簡、樂器、車・舟、容器・武器に分けて、そのものがいかなる種類の木材でつくられているかを列挙していく。(科學的検査の結果、植物學的に學名の決定されたものをa、報告者が木材の名稱をのべているものはa'、文獻にみえるものはbとする。)

1 建造物

建造物の遺跡は數多く發見され調査されているが、建材の遺存しているものが非常に少いので、ここでは新石器時代のことを二例あげておく。

a' (1) 浙江省呉興市錢山漾で調査された新石器時代晩期の黑陶をとまなう住居址は有機物の遺物を數多くのこしていたが、この中に建材と考えられる木杭・棟木狀のものが甲區第四層、乙區第四層、丙區第三層から出土した。報告ではどこから出土したものがどの木材かまでのべていないが、これらの木杭等を鑑定した結果、櫟(くぬぎ)・杉・樟・青岡木(かしは)・甜櫨木

(いちいがし)・苦楮木(あかがし)・朴(ほお)で、なかでも苦楮木がもっとも多いとされている。⁽²⁾

(2)雲南省劍川縣海門口で一九五七年に調査された遺跡は住居址をともし多くの木杭・横梁・床板がみられた。出土品には石器(斧・斨・鑿・刀・鎌・錐・環・紡垂車等)、陶器(夾砂陶と硬陶の二種)、骨角器(針・錐・紡垂車・盾等)、銅器(銅製の斧・鉞・刀・鑿・環・魚鉤等で、斧の鑄造用陶範もみられる)があり、時代は巴蜀式の銅斧からみて春秋時代に下るものと思われる。建材はすべて松で、他の木はないと報告されている。⁽³⁾

b 文獻にしるされた建造物でいかなる木材を使用していたかをうかがい知ることのできる史料は少いが、次にそれをあげてみよう。

(1)陟彼景山、松柏丸丸、是斷是遷、方斲是虔、松栢有梲、旅楹有閑、寢成孔安、(詩經商頌殷武)

この文によると高宗の廟寢をつくるために、景山の松と柏を切りだして、松材で栢(垂木)をつくったことがわかる。このような松栢は外にもあった。

(2)徂來之松、新甫之柏、是斷是度、是尋是尺、松栢有烏、路寢孔碩、新廟奕奕、奚斯所作、(詩經魯頌閟宮)

これも廟寢の建築で松材で栢をつくった例である。廟の建築には松材以外に(1)・(2)にあるごとく柏材も使用されたが、外に栢(もみ)材も利用されたようで、

(3)爾雅釋木の「櫟、松葉柏身」の郭璞注に「今大廟梁材用此木」とある。

(4)山海經中山經の「又東南二百里曰前山、其木多櫟」の郭璞の注に「似柞、子可食、冬夏生、作屋柱難腐」とある。櫟(かし)材で柱をつくと腐敗しにくいことが知られる。(3)・(4)は晉人の説ではあるが参考になるのでここにあげておく。

(5)桂棟兮蘭橑、辛夷楣兮葍房、(楚辭九歌湘夫人)

神の宿る室を築いた時の様子をうたったもので、楚地方の一般の建築ではないが、これによると、桂(かつら)材の棟木、蘭(木蘭)材の橑(垂木)、辛夷(こぶし)材の楣(門戸上の横梁)があったことが知られる。

(6)夏禹廟以梅木爲梁、(吳越春秋)

この梅木は、説文六篇上の「梅、柑也、可食、从木每聲、煤或从某」、爾雅釋木の「梅、柑」などから、楠(くすのき)と同じものと考えられる。

(7)阿房宮……作阿房前殿、東西五百步、南北五十丈、上可坐萬人、下建五丈旗、以木蘭爲梁、以磁石爲門、(三輔黃圖卷一)

秦の始皇帝がつくった阿房前殿の梁が(5)の楚辭にみえる木蘭(もくれん)と同じ種の木材であったことがうかがえる。

(8)營未央宮因龍首山以制前殿、至孝武、以木蘭爲桷、文杏爲梁柱、金鋪玉戶、華榱壁璫、雕楹玉碣、重軒鏤檻、青瑱丹墀、

左城右平、黃金爲壁帶、間以和氏珍玉、風至其聲玲瓏然也、(三輔黃圖卷二)

漢高祖七年に蕭何によって建築された未央宮の前殿が武帝の時に改築されたようで、その時に、桷(むなぎ)と桷(たるぎ)は木蘭で、梁(はり)と柱(はしら)は文様のある杏(あんず)でつくられたようである。

(9)溫室殿、武帝建、冬處之溫煖也、西京雜記曰、溫室以椒塗壁、被之文繡、香桂爲柱、設火齊屏風……(三輔黃圖卷三)

未央宮殿の北にある溫室殿は武帝の時の冬期用の暖房つき建物で、この柱が香りのよい桂(かつら)でつくられている。桂を柱にした例は外にもあり、

(10)一説、甘泉宮南有昆明池、池中有靈波殿、皆以桂爲殿柱、風來自香、(三輔黃圖卷四)

一説ではあるが昆明池中にあった靈波殿の柱も桂で香りは風にのってただよっていた。以上のように香りのよい木材を建築に利用する例は外にもあり、次の一例はそれである。

(11)柏梁臺、武帝元鼎二年春起、此臺在長安城中北關內、三輔舊事云、以香柏爲梁也、帝嘗置酒其上、詔群臣和詩、能七言詩

者乃得上、太初中臺災、(三輔黃圖卷五)

柏梁臺は漢書卷六武帝紀に「(元鼎二年)春起柏梁臺」と「(太初元年、十一月)乙酉、柏梁臺災」とあり、建築後わずか十一年でくずれた臺であるが、三輔舊事によると梁は香りのよい柏でつくられ、太平御覽卷九五四にひかれた漢武故事には「柏梁臺、

高二十丈、悉以栢、香聞數十里」とあって、その香りが四方數十里にまでひろがっていたことがしられる。またこれによると梁だけでなく建物全體が栢材でつくられていたことになる。

(12) 間徒倚于東廂兮、觀夫靡靡而無窮、擠玉戶以撼金鋪兮、聲噌吰而似鍾音、刻木蘭以爲榱兮、飾文杏以爲梁、羅丰茸之遊樹兮、離樓梧而相撐、施瑰木之櫨櫨兮、委參差以橫梁、(文選卷一六)

司馬相如の長門賦の一節である。武帝の時、陳皇后が一時、寵愛をうしなつて下つた長門宮の建物をのべたもので、これによると木蘭材に彫刻をほどこしたのを榱(たるき)とし、文様ある杏材を梁としたことがわかり、(8)の未央宮前殿と同じ木材を使用していることになる。

(13) 漢武寶鼎二年、立豫樟宮於昆明池中、作豫樟木殿、(太平御覽卷九五七)

これは太平御覽にひかれてある文でいつのことかはわからないが、後漢の人張衡の西京賦(文選卷二)に「迺有昆明靈沼、黑水玄址、周以金堤、樹以柳杞、豫章珍館、揭焉中峙……」とあり、薛綜の注によると「皆豫章木爲臺館也」とあって、漢代に昆明池に豫章(くすのき)材でつくられた建物があったことがしられる。

以上の外、確實にいないが桂宮⁽⁴⁾とか桐門⁽⁵⁾とか樹木の名をつけた建物もその木材を使用した建物であったかも知れない。たとえば、三輔黃圖卷三に、「竹宮、甘泉祠宮也、以竹爲宮」とあって、竹でつくられた宮から竹宮といわれ例もあり、もう少し検討する必要がある。

2 槨・棺等

堅穴の墓坑に木材で槨室をつくり、木棺を入れて埋葬する法は殷中期から漢代にかけてみられるが、ほとんど木槨・木棺は腐敗して灰状になって痕跡をとどめているだけで、いかなる木材を使用していたかの全貌を知り得ないが、次にあげる例によってその大略を知ることができる。

a (1) 科學的鑑定をうけて木材の種類を確定しているのは、一九七二年春に調査された湖南省長沙市五里牌の馬王堆一號墓の木槨・木棺だけである。この墓は有機質の木質の品物、織物をはじめ棺内には遺體さえほぼ完全にのこしていた特別に保存のよい墓であり、封泥にみられる軼侯の名稱や遺物等から時期は前漢前期の紀元前二世紀頃と考えられている。

木材の鑑定は江西木材工業研究所があたっているが、それによると木棺は梓屬の一種 (*Catalpa* sp.) であるが、それが楸 (*C. bungei*) かあるいは梓 (*C. orata*) かまでは確定できなかったようである。木槨は杉 (*Cunninghamia lanceolata* (Lamb.) Hook.) と確定している。

(2) 朝鮮民主主義人民共和國の首都平壤市郊外には漢代の樂浪郡治がおかれ、その周辺には漢代文化のもとでつくられた多くの墓があつた。これらの墓の調査は大正初年からおこなわれたが、その中で嚴密な意味での鑑定ではないが一應、専門學者によつて觀察されたものをあげてみると、大正五年秋に調査された貞柏里二號墳と六號墳の木槨は栗材、三號墳の木棺は樟材の類、六號墳の東棺は柏材であると報じられている。⁽³⁾ 昭和五年調査の梧野里の木槨墓のうち一八號・一九號・二〇號・二一號墳の木槨はモンゴリナラ (*Quercus mongolica*, Fisch.)、木棺はイチイの類 (*Taxus cuspidata* S. etz.) とされ、⁽⁴⁾ 昭和六年調査の彩篋塚は多くのすぐれた遺物をだしたが、この木槨もやはりモンゴリナラであつたといわれ、⁽⁵⁾ つづいて翌七年に調査された王光墓は、木槨が檜材、内槨と棺が檜材と觀察されている。⁽⁶⁾

a' (1) 柏材、現在もつとも時代のさかのぼる例は、河南省輝縣琉璃閣で中央研究院が調査した春秋中期後半の八〇號墓の附葬墓である五五號墓の木槨で柏材でつくられていた。又、河南省博物館が調査した墓甲と墓乙は八〇號墓とほぼ同時期か、もしくは少しさかのぼるが、この兩墓の木槨は柏材でつくられよく保存されていた。⁽⁷⁾

湖南省博物館が一九七一年二月に長沙市瀏城橋で春秋後期にあたる木槨墓を調査した。木製品が非常によくのこっていて、信陽楚墓、江陵楚墓に匹敵する遺物をのこしていたが、しかし報告に木質のしるされているのは外槨についてだけで、「木質良好、多爲柏木」と報告されている。⁽⁸⁾

漢代になっても柏材が槨室に使用されていた。廣州市黃花岡公園の南で一九五六年に調査された三號墓は柏材の槨室であった。墓の時期は陶器の甗・三足小盒等の形、銅熏爐の形式等から前漢初期と考えられる⁽¹⁵⁾。この地方では後漢時代にいたる間も柏材の槨室がつくられていた。前漢末期と考えられる廣州市南郊の南石頭で調査された二號墓⁽¹⁶⁾と後漢時代とされている廣州市龍生岡四三號墓の槨室がその例である。とくに後者の槨室は一本の大きな柏材をくりぬいて蓋、壁と封門の門柱をつくりだしていた⁽¹⁷⁾。

柏材は他地方にもひろく利用されたようで、甘肅省武威縣磨咀子で一九五九年に調査され、武威漢簡といわれる儀禮の木簡を出土した六號墓は土洞墓形式で、墓室内に柏材の棺が二つおかれていた⁽¹⁸⁾。この地區にはこの墓以外に三六座の墓があつて調査され、ほとんどが後漢時代前・中期にあたるものであるが、墓室内の棺材は松と柏とを使用したものであると報告者はのべている⁽¹⁹⁾。また一九七二年春にこの地で調査された三五座の墓も同じ形式の墓で、前漢時代末期から後漢時代中期にあたるが、棺材はやはり柏材を使用していたことがしられる⁽²⁰⁾。

同じく甘肅省の嘉峪關市東方で一九七二年春に四座の畫像磚墓が調査された。墓は封土内につくられた多室墓で、壁面には畫像磚と壁畫がはめこまれている。この四座の墓の後室から、すべて棺が発見されその棺材はすでに腐朽しているが、多く柏材であると報告されている。時期は後漢時代後期と推定される⁽²¹⁾。

内蒙古自治区の包頭市郊外の孟家梁で一九五六年に調査された四座の木槨墓の槨材は約三〇厘の方形の柏材を使用している。時期の正確なことが略報の爲に不明であるが漢代のものであることには間違がない⁽²²⁾。

青海省西寧市南灘で一九六〇年六月に調査された磚室墓は木製の遺物をだした後漢時代の墓で、柏材の棺が一つ入れられていた⁽²³⁾。

樂浪でも柏材の木棺がみられる⁽²⁴⁾。(石巖里二〇一號墳)

以上が柏材を使用した棺槨の例である。報告が少いので明確でないが、廣い範圍に柏材が棺槨材に使用されていたことが推

測される。又、時代が下つても使用されていたようで、一つは遼寧省北票縣西官營子で一九六五年秋に調査された北燕國の馮素弗（北燕國王馮跋の弟）の妻屬の墓である石槨墓（一號墓）の彩畫木棺が柏材であること⁽²⁶⁾。他の一つは山西省大同市東郊石家寨村で一九六五年冬から六六年春に調査された多室磚築墓は北魏の高官司馬金龍夫妻の墓で、木板漆畫（屏風）をはじめとしてすぐれた遺物を出土したが、この墓室にあった木棺も柏材であったことから、そのことがしられる⁽²⁸⁾。

(2) 楠材、もつとも時代のさかのぼるのは、河南省輝縣東郊の固圍村で一九五〇年より三年間かけて調査された戰國中期の大槨墓のうち一號墓の木槨室の内槨で黄色の厚木でつくられていた。この木材について、報告者は「質似梗楠之屬、未經鑑別、尙難肯定」として、明確にその木材の名前をあげてはいないが、目でみたところ楠に似た梗材か楠材に似ているとしている⁽²⁸⁾。

湖南省長沙市附近で調査される戰國後期の木槨墓の棺槨が柏材とならんで多く楠材でつくられていることは報告者によつてのべられている⁽²⁹⁾。たとえば、長沙市郊外、嵩山鎮で一九二五年に偶然に堀られた木槨墓中の木棺は香りの良い楠材といわれている⁽³⁰⁾。又、南郊左家塘で調査され、「四年相邦呂工寺工龍承」の銘文がある銅戈が出土した木槨墓は、全部楠材につくられている⁽³¹⁾。この墓は銅戈銘の「四年」が秦の始皇帝四年、「相邦呂」は呂不韋と考えられることから、大體秦末から、前漢初期のものと考えられる⁽³²⁾。

四川地方の戰國後期から前漢後期にかけての墓にも楠材が使用されていた。四川省昭化縣寶輪寺と巴縣冬笋壩とで一九五四・五五・五七年に調査された、大概四世紀末から二世紀初にかけての墓は船棺葬の名で稱せられる船形の木棺を埋葬して有名である。この船棺は四世紀末から三世紀にかけての墓にあり、直徑一米餘りの楠木をくりぬいて獨木舟の形をしたもので、埋葬法に二種あり、一つはこの獨木舟型の棺に直接、遺體・殉葬品をいれる方法と、この船の中に小形の木棺を入れる方法があるが、この小形棺も楠材でつくられていた⁽³⁴⁾。時代が少し下る三世紀後半から二世紀初にかけての細長い堅穴に木槨をきづいた墓の木材もすべて楠材を使用していた⁽³⁵⁾。成都市北郊の洪家包で一九五六年秋に調査された木槨墓は、陶器（罐、井戸等）、銅器（三螭鏡、連弧紋鏡、燈架、盆）、漆器（盤、奩）、半兩錢等を出土した前漢前期にあたる墓であるが、この内外の槨室が楠材で

つくられていた。⁽³⁶⁾ この墓より時代が下る、前漢後期と考えられる木槨墓が成都市北郊の鳳凰山龍家巷で一九五八年冬に調査された。形式は堅穴土坑に楠材を使用して内・外槨室をつくったもので、外槨だけで三二ヶの木材塊を使用している。槨内からは陶器（罐・井・甕・鑑等）、木器（俑・馬・牛・猪・案等で黒色漆がぬられていた）、漆器（耳杯・盤）、銅器（楊廣成・「楊安國」の兩面印等）等が出土している。⁽³⁷⁾

江蘇省揚州市での鳳凰河改修工事中的一九五五年冬に漢代墓が七座調査された。この中で五號墓は堅穴土坑の木槨墓で、槨室・棺（二棺）とも楠材でつくられ、とくに槨材は同じ楠材であるが少しづつ木の油氣・色に差がある。このことは何本もの楠材を使用していたことをしめしていると思われる。棺槨内からは陶器（壺・盒等）、漆器（奩・盒・耳杯・碗・盤）、銅器（熏爐・匣・洗・鏡等）、五銖錢、鐵刀等が出土していて、時代は前漢前期にあたりと考えられる。⁽³⁸⁾ この木槨とつくりが相い同じものが、淮南市青蓮崗で一九五八年春に調査されている。この木槨墓の棺が楠材をくりぬいて、兩端に木口板をおき、蓋をする形式のものであった。時代は「大布黃千」と「大泉五十」の王莽錢をだしていることから王莽の新から後漢初期と考えられる。⁽³⁹⁾ 揚州市西門外の七里甸の丘上で一九六二年春に堅穴土坑式木槨墓が調査され、楠材でつくられている木槨と木棺（二棺）とが發見された。棺はくりぬき形である。遺物は陶器（壺・罐）、漆器（耳杯・勺・盒・面罩盤等）、鐵器（釜・鍋）と剪邊五銖錢があり、時代は後漢初期と考えられる。⁽⁴⁰⁾ 連雲港市海州の網疇莊で一九六二年夏、大雨の後に木槨墓が露出し、楠材を使用した木槨と木棺（二棺）が發見された。木棺はくりぬき形で、兩端に木口板をはめこんだものである。遺物は陶器（壺）、漆器（奩・盒等）、銅器（鏡・刷・五銖錢）、木器（俑・釵・衣物券）、鐵劍、猪形玉器、琥珀虎形飾品等があり、時代は五銖錢と漆器の文様から前漢末期から後漢早期にあたりとされている。⁽⁴¹⁾ 鹽城縣伍佑公社の三羊墩で一九六三年秋に調査された墓は破壊されていたが、墓道と堅穴墓坑とかなり、中に楠材を使用した木槨室と三つの木棺、二つの側邊室があった。⁽⁴²⁾ 槨室と側邊室の四周には埴を一列にたてかけ、そのまわりに槨室の天井と同じ高さまで土をうめ、その上に埴をひいて二層臺にしていた。棺はくりぬき形で兩側には木口板をはめこんだものである。出土した遺物は陶器（硬釉の壺・罐・釜と甕等）、銅器（鏡・博山爐・鑑・壺・樽・鏃斗・刷・弩弓・馬具・五銖錢等）、

鐵器（爐・刀・戟）、漆器（耳杯・盤・碗・盒・奩・案）、木器（衣物券・俑・器足）、石器（礪石・黛板・琿）があり、前漢末期から後漢早期の間のものと考えられる。儀徵縣石碑村の牧牛山で一九六五年夏に二つの墓が調査された。一號墓は長方形の堅穴土坑に楠材を使用した木槨と木棺とがあり、棺はくりぬき形で兩側に木口板をはめこんだものである。遺物には陶器（釉陶壺）、銅器（帶鈎・鏡・量・碟形器・過濾器・尺・刷）、鐵器（白杵・刀・劍）がみられる。二號墓は一號墓とほぼ同じ形式で、楠材を使用した槨室と二つの木棺からなり、棺はやはりくりぬき形で、兩側に木口板をはめこむ形式である。遺物には陶器（釉陶の壺・罐・瓮と泥質灰陶の甕）、銅器（鏡・劍格・五銖錢）、鐵器（刀・劍）、石器（磨・黛板）がある。時代は釉陶壺の形式、磨廓五銖錢等から後漢中期と考えられる。⁽⁴³⁾

以上が報告に楠材を使用したとはっきり書かれた棺槨の例である。他にもまだあることは充分に考えられることであるが、ここからは河南・江蘇・湖南・四川の各地方に存在したことが確認される。また江蘇地方の各例からみると棺はほとんどくりぬき形で、これからみると少くとも大體、直徑八十厘以上の大きな楠材を使用していたことが知られる。

(3) 松材、いままでのところは周邊部で發見されている。廣州市南郊の南石頭で工事中の一九五四年秋に發見された二つの墓のうち一號墓は長方形の墓坑と墓道とからなり、墓坑内に木槨がつくられていた。木槨はほとんど腐朽していたが、わずかにのこった東側の槨壁材の鑑定から松材であることが知られた。遺物には陶器（壺・豆・盒・簋・甗・甬 四耳扁罐・甕・盆・盅・孟等）、銅器（壺・碗・五銖錢）、水晶・瑪瑙・珊瑚・ガラス製の珠飾がみられ、陶器の形式等からほぼ前漢末期と考えられる。⁽⁴⁴⁾

甘肅省武威縣の磨咀子の漢墓は先述した如く柏材を使用した木棺と共に、松材を使用した棺があることを報告者はのべている。⁽⁴⁵⁾

內蒙古自治區包頭市西郊の召灣郷、壕口郷、麻池郷等で一九五三年春、多くの漢墓が破壊され、翌五四年夏にその整理がなされた。この中で召灣二五號墓は長方形墓坑の中に約三〇厘角の松木を使用した木槨をしつらえた形の墓で、槨木に「上梁・右二」の字の痕跡がみられた。遺物はすでに盜掘にあっているもので少いが、銅鈎の蓋、銅刷漆器片、五銖錢等がみられる。

年代は遺物が少いものではっきりしないが、附近の召灣二三號墓(木槨墓)に明器の井戸がみられること等から前漢後期以後と思われる。⁽⁴⁶⁾

(4) 杉材、湖南省長沙市南郊の砂子塘で、一九六一年夏に調査された墓(六一・長・砂・M〇一號墓)は斜坡墓道をもつ堅穴墓坑の中に木槨をつくる形式で、槨は内外の二槨に、棺は内外棺の二つになっていて、すべて杉材を使用している。槨材には「東」「西」「南足」等の文字がみられ、木材の大きさは長さ約四米五十糧位から二米前後、幅は九〇糧前後、厚さは二五糧前後である。外棺には漆繪がみられる。⁽⁴⁷⁾墓内はすでに二度の盜掘にあつてあらされていたが、盜掘時の話しと調査のときを勘案して出土遺物をみると、陶器(鈚・豆・罐・鼎・盒・勺・博山爐等)、漆器(耳杯・匱・盒・几・奩・盤等)、木器(俑・鈚・圓壺・璧・杖・封泥匣等)があり、外に泥半兩、泥郢稱がみられる。時代は半兩・郢稱の泥錢・泥板があるが五銖錢がないこと、木槨のまわりに木炭・白膏泥をつめていること等から前漢前期と考えられる。杉材を使用したことがはっきりしているのはこの一例だけである。

(4) 枋材、これも一例だけである。陝西省寶雞縣の東にある陽平鎮の秦家溝で一九六三年秋に調査され五つの墓はほぼ同形で、長方形の堅穴墓坑に二層臺がみられる。この中に木槨がつくられ木棺が入れられていたが、木槨壁と二層臺にかかる木槨の天井にもあたる棚木と底にしかれた板が枋材(檀の一種)を使用していた。⁽⁴⁸⁾遺物は一般に棺槨の間におかれていて、陶器(盆・甗・鬲・豆・匱・罐・壺・盤・圭等)、銅器(方壺・鼎・簋・匱・盤・鈴・鐃・馬銜・車轄・櫛飾品等)、玉器(圭・珠・魚・玦等)、骨器、石器(石飾・貝型品等)、瑪瑙珠等がみられ、時代は墓の形式からのもとも古い墓は春秋中期までさかのぼり、下限は戰國中期と考えられる。

(5) 横材、これも一例で、しかも報告はごく簡単なものであるから正確に一項目をもうけるのが適當かどうかは不明であるが、一應あげておく。報告によると一九五五年に調査された安徽省壽縣の木槨墓の槨材が横材であったことがしられる。⁽⁴⁹⁾

(6) 櫓材、a (2)で先述した如く、樂浪の漢代墓の木槨には櫓材を使用した例が多くあり、且つ科學的鑑定をうけているが、ここでは鑑定をうけていない例をあげておく。貞柏里第一三號墳の木槨床材、⁽⁵⁰⁾將進里第三〇號墳の木槨材、⁽⁵¹⁾石巖里第二〇一號墳

の木槨材がそれである。⁽⁵²⁾

(7) 白楊材、新疆省民豐縣北方の大沙漠中で一九五九年に大居住址が発見され、その墓葬區からは白楊材でつくられた木棺がでてきた。木棺は四角の四柱に四壁の木板をはめこみ木釘でとめる形式で、⁽⁵³⁾内部にはミイラ狀の男女合葬があった。副葬品には木器（豆狀の木器・小筒・杯・碗・叉・梳等）、陶器（黑陶瓶・紅陶罐）、銅鑲、銅鏡（内行花文鏡で銅製の袋に入れられた籐製の奩の中にはいついた、銅戒指、金片、珠（珊瑚製とガラス製）、弓、鐵刀、籐奩、布類（綢衣、綉花綢鏡袋、綉花粉袋）、遺體につけられた衣服（男には錦袍・褲・袜・手套、女には内上衣・外上衣・衬衣・裙子・袜子・袜帶・手帕）と菱形の枕（延年益壽宜子孫）錦製）がみられる。時代は布類のとくに錦の圖案と隸書、銅鏡から後漢時代のもので、現地の人の墓葬と考えられる。

(8) 樺材、内蒙古自治区呼倫貝爾盟札賚諾爾で一九六〇年の夏、三一座の墓が調査された。墓は木圖那雅河東岸の一段高くなつたところがあり、すべて堅穴墓坑の中に樺材製の木棺を入れた形式である。棺は有蓋無底のものと、有蓋有底ものがあり、四角に角柱をたて、それに壁板をはめこんでいる。⁽⁵⁴⁾副葬品には陶器（罐・壺・鉢・碗・尊・双耳罐等）、銅器（裝飾品・鏡等）、鐵器（矛・鏃・刀等）、骨器（鏃・裝飾品等）、木器（樺木皮製盒・樺木皮製弓囊・弓等）等がみられ、漢民族の墓ではなく鮮卑族のものと思われる、時代も後漢末期にあたるとみられる。

以上が棺槨に使用された木材の科學的鑑定をうけてしられるものと、報告者の觀察で材質をのべられたものである。次は文獻の中で棺槨の木材をどうのべているかを二三あげてみたい。

b (1) 天子之棺四重、水兕革棺被之其厚三寸、柅棺一、梓棺二、四者皆周、棺束縮二衡三衽每束一、柏棹以端長六尺、（禮記

檀弓上）

天子の棺槨についてその制をのべた文であるが、これによると天子の棺は四重で、一つは水兕の革でつくられ、一つは柅材でつくられ、他の二つは梓材でつくられていることがしられる。又、槨は柏材を使用している。ここにみえる柅は鄭玄の注にひかれる爾雅の「檜杙」からすると、檜と同じで、それは爾雅釋木の注によると「樹似白楊」とある。梓は「あづき」で棺を

つくるのに一番よく使用されたばかりが、いろいろな木器の材木としてももっとも良いとされていた。槨室を柏材でつくることは先述のごとく各地の木槨墓の調査でしられる。

(2) 君松槨、大夫柏槨、士雜木槨、(禮記喪服大記)

この文によると諸侯は松材で、大夫は柏材で、士は雜木の材で槨室をつくっていたことになる。大夫の柏材は天子の柏材とはことなり、黄腸を使用しなかったと考えられる⁽⁵⁵⁾。

(3) 宋有荊氏者、宜楸柏桑、——(中略)——七閭八閭、貴人富商之家求禪傍者斬之、(莊子人門世)

この莊子の話しは有用の無用性と無用の有用性を説いた話しの一部にみられる。⁽⁵⁶⁾ 宋の荊氏という地方は楸と柏と桑の三つの木に適したところで、その木の幹の太さにより用途がことになったが、七かかえも八かかえもある太さになると、棺の一枚板の側板に使用するため、貴族・大商人達がこれを斬ってしまうとのべている。これによると柏以外に楸(ひさぎ)や桑も棺材に使用されていたことがしられる。

(4) 昔者、堯北教乎八狄、道死葬蛭山之陰、衣衾三領、穀木之棺、葛以緘之、(墨子節葬下)

堯にたくした話であるが、節葬には穀木を使用していたという墨子の考えがしられる。穀木とは説本六篇上木部によると「楮也(かうぞ)」とあり、毛詩小雅鶴鳴の傳では「穀惡木也」とあって本來は棺材に適さないものである。

(5) 賢良曰、——(中略)——古者瓦棺容尸、木板聖周、足以收形骸藏髮齒而已、及其後、桐棺不衣、采槨不斲、今富者繡牆題湊、中者梓棺槨槨、貧者畫荒衣袍、繪囊緹橐、(鹽鐵論散不足篇)

丞相をはさんで御史大夫と賢良が富の不均について論じた時、賢良はこのごろの士大夫達が禮義をおろそかにしていることを具體的にのべた言葉の一節に、棺槨が昔にくらべて、ぜいたくになり、富める者は天子とあまりかわらない様な棺槨をつくったことをのべて非難している。これによると、賢良の考えている中世では桐材の棺をつかい、現在のすなわち漢代では中家の人で梓材の棺、槨材の槨をつくっていたことがしられる。このような度をこした漢代の浮侈について王符はまた次のよう

にのべている。

(6) 古之葬者、厚衣之以薪、葬之中野、不封不樹、喪期無數、後世聖人易以棺槨、桐木爲棺、葛采爲緘、下不及泉、上不泄臭、中世以後、轉用楸・梓・槐・柏・桤・樗之屬、各因方土、裁用膠漆、使其堅足恃、其用足任、如此而已、今者京師貴戚、必欲江南櫟梓・豫章之木、邊遠下土、亦競相放效、(潜夫論浮侈篇⁵⁷)

これによるとともっとも古い時代には人を葬るのには木槨・木棺も墓の盛り土もなかったが、聖人達の時になると桐材で棺をつくるようになった。ところで、(5)にもあるごとく、聖人達の棺は棺をつくるのに適していない桐材を使用している。⁽⁶⁸⁾ 他にも桐棺を使用した話としての、春秋左氏傳哀公二年の「桐棺三寸、不設屬辟」は罪あつて後の葬る棺として桐棺をいつてその粗末をのべている。呂氏春秋高義篇の「乃爲之桐棺三寸、加斧鎖其上」、墨子節葬篇下の「禹……道死葬會稽之山、衣衾三領、桐棺三寸、葛以緘之」、史記卷一三〇太史公自序に墨者の行いとして「其送死桐棺三寸」とのべられているのも略同じ意である。このような點からみると、桐材は材質の上からいつて棺材に適していなかったのであろう。潜夫論の文にもどると、次に中世以後のこととして、次第に奢侈になつて來たことをのべ、桐材にかわつて、楸・梓・槐・柏・桤・樗の材をもつて棺をつくるようになったとしている。しかしそれでもまだ、それぞれの地方に産するものを使用していた。しかし漢代になると、都の王侯・貴族や富者は棺材にはどこそこのなりの木がよいというようになり、江南地方の櫟や梓や豫章の木がもっともよろこばれたことが、この文からしられる。

(7) 請以人君禮葬之、王曰、何如、對曰、臣請以彫玉爲棺、文梓爲槨、梗楓豫章爲題湊、(史記卷二二六滑稽列傳優孟傳)

これは楚の莊王時代の話で潜夫論の中世にあたる時の君の葬禮である。話は莊王の愛馬が死んだ時、王は大夫の葬禮で棺槨をつくろうとしたところ、左右の者がこれを非難した。ところが優孟は楚國は堂々とした國であるから王の愛馬を大夫の禮で葬つても、それは禮より薄い、むしろ君の禮でもつて葬つたらよろしいといつて、王に君禮を答えたのである。これによると棺は彫玉製、槨はうつくしい梓材をもつてし、又、梗や楓や豫章をもつて二重目の槨をつくることがしられる。

(8) 方石、治黃腸題湊、便房如禮、(續漢書卷六禮儀志下)

後漢の大喪についてのべた文の一部で、これによると皇帝の墓の槨室は黃腸をもって題湊といわれる方法でつくられていたことがしられる。ここの劉昭注にひかれた漢舊儀に壽陵のことが略載され、特に武帝のそれについて次のようにかかれている。「武帝墳高二十丈、明中高一丈七尺、四周二丈、内梓棺・柏黃腸題湊」と。棺は梓材でつくられ、槨は柏の黃腸である。黃腸と題湊については、漢書卷六八霍光傳の注にひかれた蘇林の言葉に「以柏木黃心、致累棺外、故曰黃腸、木頭皆向內、故曰題湊」とあって、黃腸とは柏木の黃色木心のことで、題湊とは續漢書禮儀志下の注にひかれた漢書音義にも「題頭也、湊以頭向內、所以爲因」とあって、木頭、すなわち柏材の切り口をうちにむけて積みあげて槨壁をつくったものをいっている。柏材を使用して槨をつくることは天子だけに限ぎらず、諸侯王等もそうであることは、續漢書禮儀志下に「諸侯王・貴人・公主・公・將軍特進(薨)、——(中略)——使者治喪、穿作柏槨」とあることによってしられる。

(9) (霍) 光薨、——(中略)——賜金錢繒絮繡被百領、衣五十篋、璧珠璣五衣、梓宮、便房、黃腸題湊一具、椁木外臧梓十五具、東園溫明、皆如乘輿制度、(漢書卷六八霍光傳)

(8)の後漢の大喪の禮は先述のごとく前漢時代までさかのぼることはしられるが、ここにあげた霍光の場合もそれをしめしている。光が地節二年(前六八年)に薨じた時、宣帝がもろもろの品物を下賜した中に梓材の棺、柏の槨材、外槨の材としての椁木等があったことが知られる。柏材の槨の例は外にもみられる。⁽⁶⁰⁾

(10) 建安四年二月、武陵充縣女子李娥年六十餘、物故、以其家杉木櫨斂、瘞於城外數里上、(續漢書卷一七五行志五)

建安四年(一九九年)に武陵充縣の年齢六十餘の李娥が死んだ時、彼女の家に生えていた杉の木で小さい棺をつくったことがしられる。楊樹達によると現今でも湖湘の間では杉材を棺に使用することがわかる。⁽⁶¹⁾

(11) 乃慷慨謂其諸子門人曰——(中略)——身死之日、以雜木爲棺、布單被、裁足蓋形、勿歸冢次、勿設祭祠、因飲醢而卒、(後漢書卷五四楊震傳)

質素な棺をつくるのに雑木をもつてつくれといっている。ここにいう雑木とはいかなる木材をさしているのか不明であるが、すでに禮記にも同じ言葉があつて、古くから松・柏等の棺材としてすぐれたもの以外の木材を總稱して雑木といっているようである。

(12) 檣、梓屬、大者可爲棺槨、小者可爲弓材、從木啻聲、(說文解字卷六上)

梓に屬する檣なる木の大きいものは棺槨をつくるのに使用されたことがしられる。

以上の棺槨以外に喪禮に關係したもので木材のしられる例を次にあげてみると、

(13) 元帝初元四年、皇后曾祖父濟南東平陵王伯墓門梓柱、卒生枝葉上出產、(漢書卷二七中之下五行志七中之下)

王莽の祖にあたる元帝の王皇后の曾祖父の王伯の墓にある門の梓柱がにわかに枝葉を生じはじめ屋根をこえるまでに成長したとある。これによると墓門建築の柱に梓材を利用していたことがしられる。

(14) 桑木主、尺三寸、不書諡、(續漢書卷六禮儀志下)

大喪の禮における木主の材が桑であることがしられる。ここの劉昭の注にひかれた漢舊儀には、「高帝崩三日、小斂室中牖下、作栗木主、長八寸、前方後圓、圍一尺」とあつて、小斂の時には栗木で木主をつくっている。廟に祔する木主とは材質を別にしてゐる。

以上、文獻にみえる木棺・木槨についてと墓門等についてのべてきた。ここには色々と木をあげることができる、棺材としては「桤」・「桤」・「樗」・「楸」・「柏」・「桑」・「穀木」・「桐」・「杉」・「檣」があり、槨材としては「柏」・「松」・「雜木」・「榿」・「楸」・「槐」・「桤」・「樗」・「櫟」・「梓」・「豫章」・「楓」・「樅」・「檣」を使用したことがしられる。

3 木簡

漢代の木簡には居延・敦煌等の甘肅・新疆地方の乾燥地帯におかれた邊境屯戍軍に關する書類と甘肅省武威の漢墓から發見

4 樂器

樂器の類が墓から出土する例が多くあって、その形體、大きさ等についてくわしく知られるようになったが、その材質については唯、木とあるだけで、いかなる種類の木であるのかほとんど知られていない。

a' 河南省信陽縣の長臺關附近で調査された春秋時代末期の楚國の墓は多くの木製品を保存していて有名であるが、ここからでた樂器の材質については調査中とのことであるが、唯一つだけ、嚴密にいつて樂器ではないが、編鐘をたたく鐘槌の材について、目だけの觀察で松のような材であることが知られ、復原には河南地方で今日産する木質が松によく似た楸木をつかっている。⁽⁷⁰⁾

b (1) 樹之榛・栗・椅・桐・梓・漆、爰伐琴瑟、(詩經鄘風定之方中)

この文は、序に「定之方中、美衛文公也、衛爲狄所滅、東徙渡河、野處漕邑、齊桓公攘戎狄而封之、文公徙居楚丘、始建城市而營宮室、得其時制、百姓說之、國家殷富焉」とあって、白川靜氏の考證によれば、春秋左氏傳閔公二年冬十二月の「狄人伐衛」はこの序の「衛爲狄所滅」のことをいっているのであり、僖公二年の「春、諸侯築楚丘而封衛焉、不書、所會後也」もこの序のことであることから、衛の懿公が狄人に攻められて、都、朝歌をおわれ、國をあげて河をわたって東して、曹縣の東南の楚邱に新たに邑をひらいたときの、新都建築をうたった歌の一部であることがしられる。ところでこの詩によると、楚邱に楚宮をつくった時に、とくに榛と栗と椅と桐と梓と漆の六種の木を植えて、大きく育ったならばそれをもって琴瑟をつくるということをやったっている。すなわち相當將來のことまでも考えて樹木を宮に植えることを春秋時代に行っていたことがこれからしられる。ここに植えられた六種の木をみると榛は禮記曲禮下の釋文に「榛似梓、實如小栗」とあり、榛は梓と同類であり、椅は說文解字六篇上では「椅梓也」とあり、定之方中の鄭箋でも「椅梓屬」とあることから、琴や瑟をつくるのに適した木は梓の類と桐の類の木と仕上げ用の漆であることがしられる。また說文解字六篇上に、「櫟、木旡施也、從木旡聲、賈侍中

説櫛即椅也、可作琴」とある櫛の木は、賈侍中に従えば椅と同じで琴をつくるのに適した材であることがしられ、先きの椅と同じものであるといつてよい。

(2) 孟莊子斬其櫛、以爲公琴、(春秋左氏傳襄公十八年)

襄公十八年(前五五三年)十二月戊戌の日に魯・衛の軍が齊の雍門を攻めた時、魯の孟莊子が城外の櫛の木をきって公の琴をつくつたことをのべている。ここにみえる櫛は説文解字六篇上では、「櫛、杙也」とあり、段玉裁注では杙の別名としている。杙は「たまつばき」といわれる棟科の落葉喬木である。太平御覽卷九六一にひかれた左氏傳の文では、「孟莊子斬雍門之杙、爲公琴」となっていて、櫛が杙となっているが、櫛が杙であれば、杙は杙の類であるので、櫛と杙は同類の木であることから通してもちいられていたのかもしれない。

以上が琴瑟をつくるに適した木の類についての史料であるが、一つだけ適さない木の話しが、慎子(太平御覽卷五七六)にみえる。即ち、「公輸子巧用材也、不能以檀爲瑟」とあり、木材を用ちいて物をつくるに巧みな公輸子でさえ、檀の木では瑟をつくるができなかったという話しで、これによると車をつくるに適した檀の木は強韌な木であるため、瑟の材として不適であつたのかもしれない。

(3) 殺牛取革、被鄭之桐、(史記卷二二八龜策列傳)

これは集解に引かれた徐廣の言葉である、「牛革桐爲鼓」によって、鄭の地に産する桐の木を胴にし、牛革をはった鼓がつくられていたことが、この文から知られる。

(4) 始興郡陽山縣有豫章木、徑可二丈、名爲聖木、秦時伐此木爲鼓頽、頽成、忽奔逸、北至桂陽、(荊州記卷三(麓山精舍輯本))

劉宋の盛弘之の撰になる本であるが、秦の時の話しとして記しているのでここにとりあげてみた。これによると始興郡陽山縣(廣東省陽山)に直徑が二丈ばかりの豫章木の大木があつて、聖木と名づけられていたが、秦の時に切られて鼓の胴にされたことがしられる。

された書籍とがある。この外、墓にいろいろの品物の目録ともいふべき遺策、正確には簡ではないが墓中の明器の容器等を封ずるに使用するとともに内容を書いたような木檢がある。以上のものについては科學的鑑定をうけたものがある。

a (1)夏鼎の報告によると、敦煌地方で一九四四年に發見された木簡⁽⁶³⁾を何天相（中央研究院植物研究所）が顯微鏡で切片の組織を調べた結果、次のようなことがしられた。第三號標本は雲杉（*Picea Neoveitchii* Mast.）の一種で、中國では青杆（山西地方、杆兒松（河南地方）とよばれる木で、湖北省東北部より陝西・山西・甘肅の各地方の高山にあり、材質は淡白で軽く木目があらい。日本では「とうひ」と稱する木に類している、松柏科の常緑喬木である。B字第一號標本は中國名、毛白楊（*Populus tomentosa* Carr.）で普通ボブラと稱しているもので、甘肅から華北一帯に分布している。第四號標本は中國名、水柳（*Salix babylonica* Linn.）で、垂柳とか垂枝柳ともいわれている。長江以南の木であるが、北方でも植えられ、庭園樹になっている。日本ではネコヤナギと稱しているものである。第五號標本は中國名、檉柳（*Tamarix chinensis* Lour.）で紅柳とも稱せられ、甘肅・新疆・青海地方の沙漠で普通にみられる木で、日本ではギョリュウと稱せられる。

(2)甘肅省武威縣磨咀子漢墓は木槨の項ですでにふれたごとく木製品の保存がよい墓で多くの遺物をのこしていたが、とくに第六號漢墓と稱する墓からは、武威漢簡と通稱している儀禮の木簡が出土した。中國林業科學研究所森林工業科學研究所の鑑定によると、雲杉の一種（*Picea, sp.*）で青杆あるいは杆兒松といわれているものである。特性篇が書かれていた四十簡以下五十三簡までは雲杉のこととなっているようで、いまだ鑑定を経っていないが、白楊木の一種でないかといわれている。⁽⁶⁵⁾この報告によるならば武威漢簡と敦煌漢簡は同じ木材を使用していたことになり、現地で木簡の材を手に入れていたと考えられる。しかし雲杉の類はこの地域にも分布しているが、武威漢簡の儀禮は内地から持っていたものであるかも知れない。

a' (1)朝鮮樂浪の漢代墓の一つである彩篋塚からは遺策の木簡と思われるものが出土している。報告者によると木目の正しい柏材でないかとされている。⁽⁶⁶⁾

(2)居延漢簡についての科學的鑑定はまだなされていないが、ほぼ敦煌漢簡と同じ材と考えられるが、中に非常に堅硬な木が

あり、棗木ではないかと考えられている⁽⁶⁷⁾。

- b (1)路溫舒字長君、鉅鹿東里人也、父爲里監門、使溫舒牧羊、溫舒取澤中蒲、截以爲牒、編用寫書、稍習善、(漢書卷五一路溫舒傳)

これは路溫舒が若い時、父に牧羊させられていたが、その合い間をぬって澤中の蒲をとって、それをさいて札にし編んでそこに書物を寫して勉強したことをのべているが、この時に彼が使用した蒲は蒲柳、すなわち水楊で、水邊にある楊柳科の木で、敦煌漢簡の水柳(3a(1))と同類である。

- (2)楚國先賢傳曰、孫敬編楊柳簡以爲經本、晨夜誦習、(太平御覽卷六〇六)

晉の張方の選である楚國先賢傳にみえる漢代人である孫敬の話で、これにみえる楊柳も敦煌漢簡と同じ楊柳科の木であろう。

- (3)楊雄答劉歆書曰、以鉛撻松槧、(太平御覽卷六〇六)

松材でつくられた槧があったことが楊雄の言葉でしるができる。槧とは論衡量知篇に「斷木爲槧、枿之爲板、力加刮削、乃成奏牘」とあり、木をもってつくられた文字をかくための札であることがしられる。ここで松とっているのがいかなる木なのかわからないが、敦煌漢簡や武威漢簡の雲杉の類のようなものとも考えられる。

- (4)神仙傳曰、陰長生——(中略)——著嵩高山一通黃樞簡、染之書、封以青玉之函、(太平御覽卷六〇六)

後漢時代、新野の人である陰長生が、黃樞、すなわち「はぜ」の木の簡を使用したことが神仙傳の記事からしられる。勿論、神仙の人が使用した簡であるから普通のものとは別もので一般には黃樞を使用したかどうかはわからない。

以上、木簡の材について實物と文獻からたしかめてみたが、普通には雲杉の類のような松柏科の木を使用したものと思われ、その他は地方地方の簡に適した木、たとえば甘肅地方であれば楊柳の類を多く使用することがあったと考えられる。

以上が樂器についての史料である。

5 車・舟

車・舟という交通に關する道具にも適材があることは文献によつて充分に知られているところである。實物として車が地下から發見されるのは殷代の遺跡からみられる。それでは以下、その木の類をみてみよう。

a (1) 何天相の研究調査によると⁽⁷⁴⁾以下(4)まで、河南省安陽で發見された兵車上の銅槓の頭内に殘存していた木柄(石璋如前中央歴史語言研究所一八三六七)は野茉莉科(*Stryacaceae*)の木瓜紅の屬(*Relbunodendron* sp.)の一種であると鑑定されている。

(2) 河南省濬縣辛村で發見調査された西周から東周初期にいたる墓から車が出土しているが、⁽⁷⁵⁾その金具に殘存していた木部の鑑定がなされている。

西周の墓(M二五)より出土した車の輓木(M二五・九)は榆科(*Ulmaceae*)、榆屬の一種(*Ulmus* sp.)である。

(3) 同じ墓よりでた車軸の末(M二五・二五)は野茉莉科の銀鐘樹屬の一種(*Halesia* sp.)である。

(4) 前の墓とは同じ時期の墓(M四二)からも鑿柄(M四二・一四二)がでてているが、これは青皮木科(*Olivaceae*)、青皮木屬の一種(*Schlotheimia* sp.)であると鑑定されている。

a' (1) 青海省都蘭縣諾木洪の塔里他里哈遺跡が一九五七年春に調査され、建築址、墓の遺跡の發見と、多くの遺物出土がみられた。遺物には銅器(斧・刀・鉞形器・鏃)、石器(斧・鏃・錘・鑿・刀・鏃等)、骨器(鏃・鑿・ヒ・刀・鏃・針・梳形器・紡輪等)、陶器(夾砂灰陶と夾砂紅陶の二種あり、灰陶の方が多い。製法はつみあげ式で、表面は素面が多いが壓印紋もみられる。器形には罐・双耳罐・單耳罐・四耳罐・瓮・盆・杯等がある)、毛製品(羊毛を使用した毛布とその加工品)、革履、裝飾品、骨製樂器(笛形器)等の外に松材を使用した車轂が二つあった。この轂は十六本の輻條のさしこんだところだけが残っている。⁽⁷⁶⁾この遺跡の時代は陶器の形式と遺跡の層から前後二期に分けられるが、それが中原のどの時期にあたるのかはまだ不明である。しかし銅器の形式からみると戰國時代にあたることを考

えられる。

(2)朝鮮樂浪彩篋塚出土の木製明器の中に車がある。これは明器であるので實用のものでないから、ここでとりあげるのは適當ではないが、參考の爲にあげておく。報告では車輪の輻が松柏材を使用していたとされている。⁽⁷⁷⁾

舟の資料は一九五八年春に江蘇省武進縣の淹城城内の川床より、春秋後期から戰國初期にあたる銅器(三輪銅盤・三足盤・轆匱・尊・鉤鐙)とともに丸木舟が出土したが、木材の種類については報告されていない。⁽⁷⁸⁾ 今日まで木材の種類わかる舟は一つもないが、舟具として次の一つだけが報告されている。

(3)新石器時代後期の住居址(1a⁽¹⁾)から青岡木製の櫂が出土している。長さ九六・五浬、幅一九浬でややまがった羽根狀で、背の中央に一本の凸起があり、これに柄がついていた。⁽⁷⁹⁾

b (1)今世轂用雜榆、輻以檀、牙以檀也、(周禮冬官考工記鄭玄注)

これは「輪人爲輪、斬三材、必以其時」にされた注で、攻木の工の一つである輪人、すなわち車の輪蓋を製作することを擔當している工人が、車輪に必要な三種の材木を斬るのに、季節が大切だということをいっている文にみえる三材とは、轂と輻と牙をいう、車軸と「や」と「おほわ」で、車軸には雜榆を使用している。周禮正義にひかれた程瑤田によると榆には白と赤とがあり、雜榆とは兩の色がまじった木質の榆とされている。⁽⁸⁰⁾ 車軸に榆が適していることは潛夫論卷六相列にも「猶萬物之有種類、材木之有常宜、——(中略)——檀宜作輻、榆宜作轂、此其正法通率也」とあつてしられる。輻に適している檀については、詩經魏風伐檀の「坎坎伐輻」の毛傳に「輻檀輻也」とあり、又、先述の潛夫論の言葉にもそれがみえる。牙に檀材を使用することは、山海經西山經の「又西七十里曰英山、其上多柎檀」の郭璞注に「檀木中車材」とあること、說文解字六篇上に「檀、柎也」とあり、また同じく說文に「柎、柎木、可作車、從木方聲」とあることからもしられる。また爾雅釋木に「柎、櫂」とありその郭璞注に「材中車輞、關西呼柎子、一名土檀」とあつて、やはり車輞にすなわち牙に適しているとされているが、この檀は廣韻に「木名、一名木檀也」とあつて檀の別稱とされている。もしそうであれば檀が牙に適しているという話し

の一つの傍證になる。

(2) 檣 柔木也、工官以爲栗輪、从木酋聲、讀若糗、(說文解字六篇上)

段玉裁によると、工官とは周禮にみえる輪人と同じで、漢の少府の屬官である考工室にあたるとされている。⁽⁸¹⁾ 栗輪とは安車の輪のことである。檣は山海經中山經の岨山の項の郭璞注に「檣剛木、中車材」とあり、やはり車材としてしられている。

(3) 械木、可作大車輶、從木威聲、(說文解字六篇上)

大車とは牛車のことであり、輶とは說文解字十四篇上に「車网也」とあることから、考工記にいう牙、すなわち「おほわ」である。械の木とは「かへで」の類である。

(4) 檣木、可以爲大車軸、從木齊聲、(說文解字六篇上)

牛車の軸をつくるのに適した檣の木とは廣韻に「檣榆堪作車轂」とあり、榆とともに車軸に適した木であることがしられる。文選の楊雄蜀都賦の章樵注に「檣榆屬」とあるので考工記の轂の材と同類ということになる。

(5) 白州比閭、比閭者、其華若羽伐、其木以爲車、終行不敗、(逸周書卷七王會)

朱右曾の集訓校釋によれば、孔晁をひいて次のようにいっている。白州とは東南蠻と白民とが接している地方で、川の中州から「出此珍木」していた。朱氏の考えではこの木は本草拾遺にいう欄木にあてようとしている。これは中原の例ではないが参考にあげておく。

(6) 「成侯之山、其上多木樔」(山海經中山經)の郭璞の注に「似樔樹、材中車輶、吳人呼樔、音輶、車或曰輶車」とある。晉人の解であるが、惡木の代表の樔(ぬるで)に似た樔の木が車のながえに適していたことがわかる。

(7) 「桜、白桜、械也、從木妥聲」(說文解字六篇上)とある白桜は三國呉の陸璣の毛詩草木鳥獸蟲魚疏に「其材理全白、無赤心者爲白桜、直理易破、可爲犢車軸」とあってやはり車軸をつくるのに適した材であることがしられる。

(8) 「掠、卽來」(爾雅釋木)の郭璞注に「今掠材中車輶」とあり、義疏によると、本草唐本注をひいて、葉が柿の葉のようで、

木質は堅重なもので、「むく」の木に類するものとしてゐる。木質が堅重なことから車輪のおおわに適していたのであらう。

(9)「壓桑、山桑」(爾雅釋木)の郭璞注に「似桑材、中作弓及車轆」とある。

次に舟の史料をあげてみよう。

(10)汎彼柏舟、亦汎其流、(詩經鄘風柏舟)

汎彼柏舟、在彼中河、(詩經鄘風柏舟)

鄘風柏舟の鄭玄箋によれば、「柏木所以宜爲舟也」とあつて柏材は舟をつくるに適した材で古くから使用されていたことがうかがえる。

(11)淇水滌滌、檜楫松舟、(詩經衛風竹竿)

鄭玄箋によると「檜、柏葉松身、楫所以櫂舟」とある。これは檜材でつくられた短いかいと松材でつくった舟があつたことをしめしている。松と柏は同類であるので、(10)の柏舟と同じように舟材としてすぐれたものであつた。

(12)成帝常以秋日與趙飛燕戲於太液池、以沙棠木爲舟、以雲母飾於鷁首、一名雲舟、又刻大桐木爲虬龍、彫飾如眞、夾雲舟而行、以紫桂爲柁・楫、(三輔黃圖卷四)

漢の成帝が長安故城の西にある太液池で趙飛燕と舟遊びした時の舟についてのべたところで、これによると沙棠木は注によると「沙棠木造舟不沉溺」とあつて沈まない木であることがしられ、また史記卷一一七司馬相如傳の「沙棠櫂楫」という句の下に集解に引かれた漢書音義によると「沙棠似棠、黃華赤實、其味如李」とあり、山海經西山經の崑崙之虛の條には「有木焉、其狀如棠、黃華赤實、其味如李而無核、名曰沙棠、可以禦水、食之使人不溺」とあつて、沙棠は水を防ぐことができ、實を食すればおぼれないという考えがあつて舟をつくるのに適した木材とされていたのであらう。山海經の郭璞の注にひかれた銘にも、「安得沙棠、刻以爲舟、汎彼滄海、以遨以遊」とあつて、沙棠でつくった舟で海にうかんで遊んだことがしられる。現在のいかなる木にあてるべきかは不明である。また成帝の沙棠木舟はへさを雲母で飾り、大きな桐木を彫刻して有角の龍をつ

くり舟の兩脇をかざり、紫色の桂の木でかぢとかいをつくっていた。この舟は宮殿の池での舟遊び用のものであるから、これをもつて一般の舟の例にはできない。

(13) 琳池——(中略)——(昭)帝時命水嬉、遊燕永日、士人進一豆槽、帝曰、桂楫松舟其猶重朴、況乎此槽可得而乘耶、乃命以

文梓爲船、木蘭爲桹、刻飛燕翔鶴、飾於船首、隨風輕漾、畢景忘歸、(三輔黃圖卷四)⁽⁸²⁾

昭帝が元始元年(始元元年のまちがいか)につくらした琳池で舟遊びをした時、一人の役人が豆のはいつたおけを帝にすすめた。すると帝は、桂の木でつくった短いかいと松の木の舟は重く大きい、その上にこのおけをのせることができようかといって、木の目の美しい梓で舟をつくり、木蘭でかぢをつくり、船首に飛燕と翔鶴の彫刻を飾らした。この舟は風にしたがって輕ろやかに進んだという話である。ここにみえる桂楫・松舟はすでにみえるところであるが、文梓の舟と木蘭の桹もこの時には存在し、それが輕い舟足の早いものであったらしい。しかしこの舟も(12)と同じように舟遊びの舟である。

(14) 虬泉池在五柞宮北、中有追雲舟・起風舟・侍仙舟・舍煙舟、或以沙棠爲樅楫、或以木蘭・文柘爲櫓棹、(別國洞冥記卷一)

武帝の建元二年(前一二九年)にかかる記事で、五柞宮の北にある虬泉池には追雲舟をはじめ四種の舟があり、それぞれ材がことなっていたようで、ある舟のかじや短いかいは沙棠木でつくられ、ある舟の櫓やさおは木蘭や文柘でつくられていた。沙棠木と木蘭はすでにあったが、これで柘も舟具に使用されていたことが知られる。

(15) 「桹、粘」(爾雅釋木)の郭璞注によると「粘似松生江南、可以爲船」とあって、松に類した桹あるいは粘は(11)にある松舟と同じ様に舟材に適していたのであろう。

以上で交通に關する車と舟の木材についてのべたが、ここで注意したいのは、2 a' (2)でのべた四川省昭化縣と巴縣で調査された、通稱、船棺葬とよばれる丸木舟型の棺、ないしは槨である。これは楠材でつくられているが、もしこれが報告がのべるように實用の舟を棺に利用したのであるならば、楠材でつくられた舟も長江流域のおそらく巴人であろう人達が使用していたことになる。⁽⁸³⁾

6 容器・その他

日常使用される身のまわりの器物に木製品が非常に多く利用されている。しかし木は腐敗しやすい爲に今日に残された古い時代のものは極く限られている。またその上にそれがいかなる種類の木材でつくられているかについてはますます報告がない。それで以下そのわかるものを紹介してみよう。

a (1) 佐藤武敏氏の「中國古代の漆器研究」に附載された漆器木胎の鑑定がある⁽⁸⁴⁾。これは京都大學木材研究所教授貴島恆夫氏による鑑定で、朝鮮樂浪王盱墓出土の漆器耳杯片は、クリ屬(*Castanea* sp.: *Fagaceae*)、華名では栗屬(山毛櫸科)といわれる木材を使用していたことが知られる。

(2) 同じく貴島氏の鑑定の朝鮮樂浪王盱墓出土の器種不明の漆器片の木胎はドロノキ屬(*Populus* sp.: *Salicaceae*)、華名では楊屬(楊柳科)である。とくに華名の馬氏楊に類似しているといわれる。

(3) 萬安北沙城の漢墓から出土した漆器片も貴島氏はヤナギ屬(*Salix* sp.: *Salicaceae*)、華名の柳屬(楊柳科)の木で特にシダレヤナギ、華名の水柳(*Salix babylonica* L.)でないかと推察される。また貴島氏は考察として、「なお適材の得難い該地區(河北省北部〔杉本注〕)ではヤナギ屬木材でも榛地に採用される可能性は大きいし、乾燥氣候下では立派にその役目を果し得るものと考えられる⁽⁸⁵⁾」とのべ、本來、漆器の榛地としては使用されない木材でも地方の條件に應じて使用されうることがあると指摘しているのは注目すべきである。しかしこの考えの前提には資料としてつかった漆器片がこの地方の産であるかどうかが重要であるが、この點まだ究明されていないので、検討の餘地がのこされている。

(4) 河南省汲縣山彪鎮の戰國末期の墓(一號墓)から出土した斧の柄は何天相の鑑定によると山欐科山欐屬の一種(*Symplocos* sp.)の木とされている。山欐とは灌木で、沈丁花の類と思われる⁽⁸⁶⁾。

a' (1) 楠材。四川省昭化縣寶輪院で調査された寶M一三號墓(木槨墓)は戰國末期から前漢初期にあたるが、ここから出土し

た木盤（徑三二種、現在足高四種、盤の深さ一種、盤の底厚一種）は楠に屬する木と報告されている。⁽⁸⁷⁾

漆器の木胎に楠材を使用した例としては、四川省昭化縣寶輪寺の木槨墓から出土した漆圓盒（寶M二三・一〇、寶M二三・一七、寶M一四・九、寶M一四・二三の四つある）の内、いくつかはそれであると報告されている。⁽⁸⁸⁾

長沙地方の楚墓から多くの漆器が出土しているが、木胎の木材についてふれた報告がなく、唯、商承祚氏が蔡氏という發掘現場の人の言として、沙柁木という楠の類の木でつくられていたとのべられているだけである。

後漢期のものとしては、江蘇省盤城縣三羊墩で調査された木槨墓から出土した漆耳杯（M一・八）、漆奩（M一・三）、漆案（M一・四）が楠材を木胎とした漆器としてあげられる。またこの墓から出土したなにか不明の器の木質の足（上部の断面が橢圓で、足部は長方形をしたもの、二十ヶあり）も楠材である。⁽⁸⁹⁾

(2) 松材。漆器の木胎に松材を使用したものは、前にのべた四川省昭化縣寶輪寺の墓から出土した漆圓盒の一部にみられる。⁽⁹⁰⁾ 以上わずかの例であるが、松材と楠材が漆器の木胎として戰國末期から前漢初期に使用されていたことがうかがえる。

朝鮮樂浪彩篋塚から出土した遺物に松材を使用した、刷毛柄狀木器、木俑の手足、木製明器の馬の蹄部がみられる。⁽⁹¹⁾

(3) 櫛材。朝鮮樂浪彩篋塚出土の木槌、梯形有孔木器が櫛材か、もしくは栗材でつくられていたと報告されている。⁽⁹²⁾

(4) 黃楊木材。朝鮮樂浪王光墓（眞柏里一二七號墳）から出土した印は、この墓の主人の名前をしめしたものであるが、その印の一つである、「樂浪太守掾王光之印」と「臣光」の刻のある兩面木印は黃楊木の材でつくられていたといわれる。⁽⁹³⁾ 黃楊木とは今日でも印や櫛によくつかわれる「つげ」のことである。

(5) 榆材。黃文弼氏が一九三〇年と三四年に調査したロプノール地方の烽燧臺のあとで發見した漆器の扁形匣はなにに使用したか不明であるが、木胎が榆材であったといわれる。また、この調査で發見されたロプノール湖畔の墓は漢文化の影響をうけた、この地方の民族の墓であるが、ここから出土した漆器の卮形器（L万墓とL七墓から一點づつ出土）の木胎ははっきりとわからないが、黃氏は籐木材か榆材でないかとうたがっているので、一應ここにあげておく。⁽⁹⁴⁾

(6) 櫻材?。敦煌の烽燧臺で發見された數々の木製品についてはA・スタイン氏の報告にみえるが、その中の楸狀の木製品(T. XIV. a. II. 001)が赤茶色の木目のこまかい、樹皮のすべすべした櫻材のようなものでつくられていたと報告されている。⁽⁹⁵⁾

(7) 白楊材。S・ヘディン氏が樓蘭で發見した木製品についてF・ベルグマン氏が研究した結果、長方形の上・下端にくびれをもった木板(K. 11227: 134)は白楊材であるとしている。⁽⁹⁶⁾

(8) 檉柳材。(7)と同じくベルグマン氏の研究であるが、木條をV字形にまげた兩端に皮ひもつけたもの(K. 11237: 29)が檉柳材であるとされる。⁽⁹⁷⁾(7)・(8)の品物は使途不明であるが、木材は樓蘭地方に存在するもので木簡の項でもみられた。

(9) 樺木材。内蒙古札賚諾爾で發見された、後漢末期にあたる鮮卑族の墓と思われるところから出土した圓牌・盒は樺皮でつくられていた。⁽⁹⁸⁾

以上が漆器の容器をはじめとするいろいろな器物の木材についてわかるものである。これだけの例で當時の木製品全體の姿をおしはかることに若干のためらいをのこすが、一應の様子がわかる。最後に時代が少し下るが、遼寧省北票縣西官營子で調査された北燕國の馮素弗の墓から出土した馬鐙の木心が桑木を使用していたことを参考までにあげておく。⁽⁹⁹⁾

b (1) 高弘到官、悉出舍中、供設付外、冬坐羊皮、夏坐板榻、以桑杯盛漿水、妻子不歷官舍、(謝承後漢書卷八)⁽¹⁰⁰⁾

太平御覽卷九五にひかれた謝承後漢書によると、高弘は河内の人で瑯琊相になったことがしられ、ここで「到官」とはこの瑯琊相になって役所に赴任したことであり、それ以下の文は役人としての彼の役所での仕事のやり方についてのべたものである。この中に彼が桑の木でつくった杯で漿(のみの類)や水をのんだことがしるされている。

(2) 樟、樟木也、可屈爲杆者、从木章聲、(說文解字六篇上)

段玉裁注によると「杆は盂で飲器なり」とあり、この杆が樟という丸くまげることのできる木でつくられていたことがしられる。段注にひかれた玉篇には「樟木、皮如韋、可屈以爲盂」とあって、これでは樹皮をもって盂をつくったことになる。樟が今日のどの木に比定されるのかは不明である。

(3)「樓、落」(爾雅釋木)の郭璞注に「可以爲杯器素」とあって、樓という木は一名落ともいわれ、杯器の素材となる木であることがしられる。陸機の詩經小雅大東にひかれた疏には「其皮堅韌、剝之長數尺、可爲絙索、又可爲甌帶、其材可爲杯器」とあり、樹皮も充分に利用價值があったことがしられる。樓は榆科の落葉喬木で、「あきにれ」といわれている木である。

(4)有餘簋殽、有棣棘七、(詩經谷風之什大東)

ここにみえる棘七とは、箋によれば「七所以載鼎實」とあり、說文解字八篇上には「七亦所以用比取飯、一名柶」とあり、棘でつくられた「さじ」であることがしられる。棘は「いばらのき」で、箋に「棘赤心也」とあって、木が赤ことがわかる。棘七が吉祭のものであるに對して、次にのべる桑の枇は喪祭に使用するものである。

(5)枇以桑、長三尺、或曰五尺、(禮記雜記上)

鄭玄注によれば枇は「所以載牲體者」とあって七と同じく「さじ」であり、それが桑材であることについては、注に「此謂喪祭也、吉祭用棘」とあって、喪祭に用いるための特別なものであることを示している。

(6)畢用桑、長三尺、刊其柄與末、(禮記雜記上)

鄭玄注によれば「畢所以助主人載者」とあって、犠牲の肉を主人が俎上にのせるのを助けるにつかうもので大型のホーク状のものである。これも桑材を使用しているのは喪祭用のものであるからである。

(7)暢白以栭、杵以梧、(禮記雜記上)

鄭玄注では「所以擣鬱也」とあって、祭に用いる酒にまぜる香り草である鬱をうつ白が栭をもつてつくられ、それをつく杵が梧をもつてつくられていたことがしられる。栭と梧について疏に「栭柏也、梧桐也、謂以柏爲白、以桐爲杵、擣鬱用柏白桐杵、柏香桐絮、曰於神爲宜」とあり、柏材の白と桐材の杵で鬱をうつことによって、より一層、神にそなえるにしように柏木の香りを利用したのであろう。

(8)桴杓、此以素爲貴也、(禮記禮器)

鄭玄注では櫨木を「白理」といい、山海經中山經の風雨之山の條の郭璞注にも「櫨木白理」とあり、白理木ともいわれる質素な木で杯をつくることがしられる。

(9) 櫨木也、可以爲櫨、从木單聲、(說文解字六篇上)

櫨はまた櫨をつくるのにも適した材であつたようで、禮記玉藻にも「櫨用櫨櫨、髮晞用象櫨」とあつてそのことがしられる。禮記の疏によると、沐髮の時に垢をおとすのに櫨製の櫨を用いるのであり、象櫨は髪を燥すのに使用するのである。山海經中山經の風雨之山の條にみえる郭璞注にも「櫨木白理、中櫨」とある。

(10) 蓋榛以爲筭、長尺而總八寸、(禮記檀弓上)

婦人の喪中の筭總についてのべた文で、これによると榛材の筭があつたことがしられる。榛は禮記曲禮下の經典釋文に「似梓、實如小栗也」とあり、梓に似た木で「はしばみ」と思われる。儀禮喪服の傳に「櫨筭也」とあり、鄭玄注では「櫨筭者、以櫨之木爲筭、或曰榛筭」とあつて、檀弓の榛材と筭と同じように解している。しかしこの鄭注については賈公彥疏で否定され、櫨は木名でない⁽¹⁰¹⁾とされ、また儀禮國譯第七集—喪服—の注も櫨筭であるとして、榛筭説をしりぞけている⁽¹⁰²⁾。

(11) 瞻彼旱麓榛楸濟濟(詩經大雅文王之什旱麓)

陸機の草木疏によると「楸木莖似荊而赤、其葉如耆、上黨人簍以爲宮箱、又屈爲釵也」とあつて、上黨の人達は楸材をあん⁽¹⁰²⁾で食物をいれるかごとくついたり、またまげてかんざしをつくつたことがしられる。

(12) 楸木、可作牀几、從木段聲、讀若賈、(說文解字六篇上)

爾雅釋木には「櫨楸」とあり、郭璞注に「柚屬也、子大如盂、……」とあつて、柑類の木であるらしい。段玉裁注によると、本草陶隱居の人參についての説をひいて、「楸樹、葉似桐、甚大、陰廣」とのべ、大木であることから、牀や几のような大きな家具類をつくることが可能であつたとしている。

(13) 榔木、可爲杖、從木郢聲、(說文解字六篇上)

繫傳に「今榔栗之屬」とあって、杖をつくる材としてしられている。

(14)「賜太師靈壽杖」(漢書卷八二孔光傳)の注にひかれた服虔の説では靈壽を木の名とされ、顔師古は「木似竹有枝節、長不過八九尺、圍三四寸、自然有合杖制、不須削治也」といって、孔光が年老いて太師となり、王太后より賜った杖は靈壽という竹に似て、自然に杖になる木でつくられたものであったことがしられる。また詩經大雅文王之什皇矣にみえる「其檜其楮」の楮は、説文解字、爾雅釋木、毛傳、すべて「横也」とあって、横という木と同じといわれている。陸機の草木疏には、横とは「節中腫、似扶老、即今靈壽是也、今人以爲馬鞭及杖」といい、郭璞も「腫節、可以爲杖」といい、どうやら晉の頃には、楮と横は靈壽と同じと思われ、杖の材として使用されていたことがしられる。藝文類聚卷六九に後漢の李尤の靈壽杖の銘がみえ、後漢時代にもあったことがしられる。

(15)榔大木、可爲鉏柄、從木勿聲、(説文解字六篇上)

榔という大木がいかなる類の木であるか不明であるが、鉏の柄に使用される木であつたらしい。

7 武器

殷周時代の武器については林巳奈夫氏のすぐれた研究があり、戈の秘など武器につかわれた木についてもべられている。⁽¹⁰³⁾しかしその木の種類についてはくわしくふられていないので、ここでそれをのべてみたい。

a (1)何天相の鑑定⁽¹⁰⁴⁾(以下(8)まで)によると河南省安陽で発見された殷代の銅矛木柄は櫟木屬の一種(*Meliolodendron* sp.)とされている。

(2)河南省濬縣辛村で調査された西周の前期から中期にあたる二號墓出土の戟の秘⁽¹⁰⁵⁾(M二・八五)は圓柱をしていて、木の類は胡桃科の胡桃楸(*Juglans* aff. *mandshurica* Maxim.)である。⁽¹⁰⁶⁾これは「おにぎるみ」といわれているものである。

(3)同じく、二號墓出土の戟(M二・八六)の秘は平片形になっているが、木の類は木樨科の白蠟樹(*Fraxinus* aff. *chinensis* Roxb.)

である。これは「とねりこ」といわれるものである。⁽¹⁰⁷⁾

(4) 同じく、二號墓出土の戟(M二・四二)は鑿(袋穗)のついた特別な形をしたものであるが、この秘は瑞香科の沉香屬(?) (*quilaria* sp. (?)⁽¹⁰⁸⁾) であるとされている。これははっきりと種類がわからないが、沉香(さやら)であるならばこれは華南の木である。

(5) 同じく、辛村の四二號墓から出土した矛(M四二・一七)の矜(柄)は紫葳科の梓樹屬の一種(*Catalpa* sp.)とされている。⁽¹⁰⁹⁾「さざげ」の類である。以上(2)より(5)は(4)を陰いて濬縣辛村、當時の衛國の近邊の太行山下に常有の木である。

(6) 河南省汲縣山彪鎮で調査された一號墓は春秋後期後半に比定されるが、ここから出土した戈(二・一六二)は「周王某之元用戈」の銘があり、秘は圓形の鑿にさしこまれる形で、儀式用と考えられる。この鑿内に残っていた秘は清風藤科の泡花樹屬の一種(*Meliosma* sp.)とされている。⁽¹¹²⁾

(7) 同じく、一號墓出土の戈秘の下端にある鐔(二・一六四)の中にのこっていた秘木は小葉白辛樹(*Pterostyrax* aff. *corymbosa* Sieb. et Zucc.)とされている。⁽¹¹³⁾

(8) 同じく一號墓出土の弓の鞘中にのこっていた木は珙桐屬の一種(*Davidia* sp.)である。⁽¹¹⁴⁾

a' (1) 湖南省長沙市東郊の瀏城橋で一九七一年冬に調査された春冬晩期の木槨墓より出土した銅戈の秘は、中心を四稜形の木心でまわりを青竹の割竹十六板でつつむようにしたものが見られる。また銅矛の矜(柄)が籐製のものが見られる。⁽¹¹⁵⁾ このよう
な秘や矜は他の場所からも出土している。たとえば湖南省常德市德山の二六號墓、五一號墓からもみられる。⁽¹¹⁶⁾ 長沙發掘報告に
よると、矛矜が籐質の、戈秘が木質のものが多くある。⁽¹¹⁷⁾

b (1) 戈戟の秘について、周禮考工記は廬人のつくるものにされているが、この廬人の廬は說文解字五篇上では簾につくり、
「簾、積竹矛戟矜也」とあり、積竹すなわち、割竹を何枚かはりあわせたものであることをいっている。長沙瀏城橋の戈秘は
その實例である。

(2) 弓の材について、周禮考工記弓人の條は、「凡取幹之道七、柘爲上、櫟次之、壓桑次之、橘次之、木瓜次之、荊次之、竹

爲下」といって、弓の幹をつくる材に柘（やまぐわ）、櫨（もちのき）、壓桑（やまぐわ）、橘（たちばな）、木瓜（ぼけ）、荊（にんじんぼく）、竹の順に良悪があることをいっている。ここにみえる竹については、孫詒讓が説文解字五篇上にみえる蕩にあてている。

また説文解字六篇上に、「櫨、梓屬、大者可爲棺槨、小者可爲弓材、從木甹聲」とあつて棺槨の材に使用された櫨の小さいものは弓の材にもつかわれた。段玉裁によると、この櫨と、周禮弓人にみえる櫨は同じ字であるとして、説文にみえる意の今の字が億、舊は今は薏、漬は今は薏に、億は今億になっているのを例にあげている。

(3) 矢橐（矢がら）の材については林巳奈夫氏は周禮考古記矢人の條の註釋の中で、考古記矢人の橐は竹製にちがいないとしている。⁽¹¹⁸⁾後漢時代にも橐が竹であつたことが、後漢書卷一六寇恂傳に、

乃拜恂河内太守、行大將軍事——（中略）——光武於是復北征燕・代、恂移書屬縣、講兵肄射、伐淇園之竹、爲矢百餘萬、とあつて、寇恂が衛の苑である淇園の竹をもつて矢百餘萬本をつくつたことから知られる。

三 木材についての考察

前節で遺物と文獻より、建築・棺槨・木簡・樂器等の木製品にどのような種類の木材が利用されていたかをとりあげた。⁽¹¹⁹⁾この節ではそれらの木材がどのような地方に産し、そうしてそれらがどのようにに流通したかをのべ、木材のもっていた中國古代での意義を少し考えてみたい。

現在の植物分布を見ると、遼東より河北・山東・河南東部は華北闊葉針葉混合林帶であり、山西・陝西は草原帶である。この兩地帯には今日では森林は存在しなく、楊・柳・榆・槐等の樹木が植えられているだけである。揚子江流域から南にかけては常綠闊葉針葉混合林帶で、杉・柏・馬尾松・楓・水青桐・楠があり、海岸線の福建・廣東地方は揚子江流域と同じ樹木以外に樟やぶな科の木がみられる。⁽¹²⁰⁾東北東南地方から朝鮮にかけては櫟・樺・紅松等がみられる。古代の樹木の分布がどうであつ

たかはわからないが、竺可楨氏の研究によると、殷代の河南地方の温度は現在より暖かく、竹類の分布、竹ネズミ・ノロ・水牛等の動物の存在から、年平均攝氏で二度位高かったと推測している。殷以降、西周初期に気温が一時さがったことがあるが、大體において溫和で現在より少し暖かく、史記貨殖列傳にみえる經濟作物の江陵の橘、陳の漆、齊魯の桑、渭川の竹など亞熱帶植物の北限が現在より北方によっていたといわれる。

以上のような樹木分布が一應みとめられるとして、先きにあげた木材をみると、先づ建築材の場合、1 b (1)の景山の松と柏の景山は河南偃師にあたるとされる。同じく(2)の徂來は山東泰安、新甫は山東新泰にあたる。これらの地域には今日、建築に使用するような松とか柏とかの木は餘りないところである。勿論、今日ないから古代にもなかったということはいえない。しかし2 a (2)のような朝鮮樂浪の木棺材の樟や柏になると、これは現地に産しない木であるから、どこかの産地から運搬して來たことが考えられる。この様に現地になく、遠い地方からはこぼれたと思われるものには、5 a (1)の河南省安陽出土の殷代兵車の銅槓の木柄の木瓜紅屬、6 a (1)のやはり河南省安陽出土の銅矛木柄の櫟木屬がある。この二つの木は「えごのき」科の木で、湖南・四川・廣東に産する珍木に類するもので、鑑定が正しいとすれば殷代にすでに遠いところから木がはこぼれたことになる。

尙書禹貢によると地方地方の土よろしきをもって貢賦を定めているが、それによると兗州（河北省西南と山東省西北の漆、青州（山東省）の松、徐州（江蘇省西北と安徽省東北と山東省南）の桐、揚州（江蘇省・安徽省・江西省・浙江省・福建省）の楸・梓・豫章、荊州（湖南省・湖北省・四川省東南・貴州省東北・廣東省北部・廣西省）の槐・榦・栝・柏がしられ、樹木の産地というものが相當古くから考えられていたようで、周禮にみえる大司徒の職はそのような地方地方の宜しきを辨ずることであつたし、又、とくに周禮の山師は、

山師掌山林之名、辨其物與其利害、而頒之于邦國、使致其珍異之物、

とあるごとく、禹貢にみえるような地方の土よろしき樹木をみきわめ、それを國中にいきわたるようにする役目をもつてい

た。

漢代においても同じように地方によって産物が定まっていた、鹽鐵論卷三通有によると、

大夫曰、五行東方木、而丹章有金銅之山、……西方金、而蜀・隴有名材之林、……今吳・越之竹、隨・唐之材、不可勝用、而曹・衛・梁・宋采棺轉尸、江湖之魚、萊・黃之鮓、不可勝食、而鄒・魯・周・韓藝藿蔬食、

とあって、丹章（安徽省當塗縣の東）の金や銅の鑛山、蜀・隴地方の名材、吳・越地方の竹、隨・唐地方の木材が地方の名産で、これに對し曹・衛・梁・宋の地方は木材がないので、棺の中の屍體をすててその木材を使用していることがしられる。またこのような地域ごとによる物資の有無を互に通ずることは、國全體の政治の上からいって重要な課題であつたと思われる。鹽鐵論はまさにこの點についての議論をまとめたものといえよう。

さて、具體的に當時どのようにして地方の材木を集めていたのであろうか。建築の場合をみると、秦の始皇帝の阿房宮及び壽陵の建設に關して、史記卷六秦始皇本紀に、

（三十五年）阿房宮未成、成、欲更擇令名之、作宮阿房、故天下謂之阿房宮、隱宮徒刑者七十餘萬人、乃分作阿房宮、或作麗山、發北山石椁、乃寫蜀荊地材、皆至、

とあって、蜀や荊地方の材を咸陽に運んだことがわかる。この蜀・荊の材というまでもなく材木のことである。また太平御覽卷一七八にひかれた拾遺記には、

秦始皇起雲明臺、窮四方之珍木、搜天下之巧工、南得烟丘碧桂、麗水然沙、賁都朱泥、雲岡素竹、東得葱嶺錦柏、縹緖龍松・雲梓、寒河星栢、西得漏海浮金、狼淵羽壁、滌嶂霞桑、北得冥阜乾漆、陰坂文杞、襄流黑魄、晴海香瓊、珍異是集、とあって、始皇帝が雲明臺をつくるにあたって全國から珍木を集つめ、十五種もの地方の珍異な木を手に入れている。以上のように始皇帝の時に於いて勿論、隴右の材木もあつたが、すでに材木を遠くはなれた蜀や荊の地方に求めなければいけない状態になつていた。⁽¹²³⁾雲明臺の建築は普通の場合でなく、特に珍異な木を集つめたのであるが、しかしこの様な木材の流通も相當

あつたと思われる。たとえば1b(8)、(9)等の未央宮や溫室殿の木蘭や文杏や香桂なども珍木の類で、やはり遠方、特に荊の地方から運こばれていたのであらうと思われる。

後漢靈帝の中平二年二月に南宮靈臺に災害があつて焼失した時に、張讓や趙忠がこの復興について帝にすすめているが、そのことについて、後漢書卷七八宦者列傳に次のようにみえる。

(張)讓・(趙)忠等說帝、令歛天下田、畝稅十錢、以修宮室、發太原・河東・狄道諸郡材木及文石、每州郡部送至京師、これによると洛陽での建設に太原・河東(山西省)、狄道(甘肅省臨洮地方)の材木が運送されたことになり、これもはなれたところからの輸送がおこなわれたことになる。

次に棺槨についてみると、王符の潜夫論浮侈篇に、

今者京師貴戚、必欲江南櫟梓・豫章之木、邊遠下土、亦競相放效、夫櫟梓・豫章、所出殊遠、伐之高山、引之窮谷、入海乘淮、逆河沂洛、工匠雕刻、連累日月、會衆而後動、多牛而後致、重且千斤、功將萬夫、而東至樂浪、西遠敦煌、費力傷農於萬里之地、

とある。この史料は有名でよくつかわれているが、ここに棺槨をつくる爲の特定の材木に對する當時の人々の執念をみることが出来る。後漢書卷三三中山簡王焉傳に、

(永元二年薨)是時、竇太后臨朝、竇憲兄弟擅權、太后及憲等東海出、故陸於焉、而重於禮、加賻錢一億、詔濟南・東海二王皆會、大爲修冢塋、開神道、平夷吏人家墓以千數、作者萬餘人、發常山・鉅鹿・涿郡柏黃腸雜木、三郡不能備、復調餘州郡、工匠及送致者數千人、凡徵發搖動六州十八郡、制度餘國莫及、

(24)とある。この話は「制度餘國莫及」しの特別な場合であるが、近邊の郡からの材木徵發だけで間に合わず、六州十八郡のごとき廣い地域から集めている。これは度をこした奢侈な墓づくりという意味と共に、當時この地方が材木不足になっていたことをも示していると思う。本來、黃河流域での棺槨づくりに柏材を使用していたことは、實例でさかのぼると、2a(1)の河

南省輝縣琉璃閣の春秋中期後半の墓にまでいたる。このように柏材を使用する棺槨づくりはこの地方では古くは普通のことであつたと思われる。しかし、それに使用する木材の量は非常に多く次第に山山の木材が濫伐され足らなくなつて來たと考えられる。勿論、棺槨築造だけでなく、春秋時代以後に多くなる都市建築に使用された木材の量も非常に多かつたことは言うまでもない。⁽¹²⁵⁾この結果として先きにあげたような始皇帝の阿房宮建築の場合に、蜀・荆の地方に材木を求めるようになったのであろうし、鹽鐵論にみえる棺槨の材も、昔と同じようなものを求めようとして、遠く江南地方の櫟梓・豫章の木に目をつけたのであろう。

次に材木の運搬についてみると、新語卷下資質に、

夫櫟・栟・豫章、天下之名木、生於深山之中、產於溪谷之傍、立則爲太山衆木之宗、仆則爲萬世之用、浮於山水之流、出於冥冥之野、因江河之道、而達於京師之下、

とあり、深山溪谷の傍に生れた名木は、伐られて山水に流されて山を下り、冥冥の野にてで、ついで揚子江・黄河という大河をはこばれて都につくとされている。前にあげた潛夫論の記事によると、高山にうまれた櫟梓・豫章の木は谷を下つて海にはいり、海上を北上して淮水にはいり、ついで黄河・洛水をさかのぼつて都に達するといわれている。⁽¹²⁶⁾以上の二つの史料によつてうかがえるように材木は谷川・海上、江河という、水運を利用して長江流域以南から都に運搬されてきた。漢書溝洫志にみる運河は穀物を運搬するのに開られた面が強くあるが、しかし一方では木材の輸送に利するところ大であつたと思われる、たとえば朝鮮樂浪の漢墓に樟材・柏材の棺槨がつくり得たのもこの水運のおかげであると考えられる。

山における伐採について、周禮山虞が次のようにのべている。

山虞掌山林之政令、物爲之厲、而爲之守禁、仲冬斬陽木、仲夏斬陰木、凡服耜斬季材、以時入之、令萬民時斬材有期日、凡邦工入山林、而掄材不禁、春秋之斬木不入禁、凡竊木者有刑罰、

と。これによると、樹木を伐採するのに時期があることがしられ、このことは禮記月令にもみえ、また周禮考工記輪人の條に

も「斬三材、必以其時」とあり、孟子梁惠王章句上にも「斧斤以時、入山林、材木不可勝用也」とあって、當時、伐採に時期をみてすることは普通のことであつた。山虞の官は森林を保護するため、時ならず伐採することを取締つたり、伐採の期日を一定の日數に限って、多く伐採しないようにする等のことをつかさどっていた。普通、伐採の時は禮記王制に「草木零落、然後入山林」とある如く、秋になつてからであるが、山虞の文では仲冬と仲夏にも伐採をしている。しかし邦工すなわち國家が木材を欲する時は時を限らず山林に入り伐採することが認められていた。ついで伐採にさいしては工師が木を求めて山中にはいつていたやうで、孟子梁惠王章句下に

孟子謂齊宣王曰、爲巨室、則必使工師求大木、工師得大木、則王喜以爲能勝其任也、

とあつてそのことがしられる。莊子卷二入門世にも匠石なる人が弟子をつれて木材をもとめて歩いている姿がみられる。⁽¹²⁷⁾この様に工師・匠人が木材を求めて歩く以外に、すでに市でも賣買されていたやうで、春秋左氏傳昭公三年の條に、

山木如市、弗加於山、魚鹽蜃蛤、弗加於海、

とあつて、齊の國では田氏が民心をあつめる方策としてではあるが、山から伐りだした木を市場で、山元と同じ値で賣買していたことがこれからしられる。

山林にはいつて伐採に従事する人々がいかなる者であるのかについてはここでのべる史料を持ちあわせていないが、後漢書卷一上光武帝紀上にある、建武三年七月庚辰の詔の文の「女徒雇山歸家」の注に、

前書音義曰、令甲、女子犯徒、遣歸家、每月出錢、雇人、於山伐木、名曰雇山、

とあつて前漢の令甲には女性の犯罪人は獄につながれず、家に歸ることを認められていたが、その代りに毎月、錢をだして、この錢で人を雇つて山林の伐採を行なわしめることがきめられていた。この伐採は薪のものであつたかも知れないが、國家には山で伐採に従事する隸屬民を持っていたのであらう。⁽¹²⁸⁾

黄河中下流での山林伐採は建築・墓づくりでどんどんすすんでいったが、その跡に植林をしたのであらうか。木を植えて將

來に備えるということは、詩經鄘風柏舟に、琴瑟をつくるため、榛・栗・椅・桐・梓・漆の木をうえたことをいつていることから古くからみられ、春秋左氏傳襄公四年の條にも、

初季孫爲己樹六檟於蒲圃東門之外、

とあって、季文子が自分の棺材として六本の檟を城の東門外の蒲圃という果樹園にうえていることが知られる。

史記卷九一貨殖列傳をみると司馬遷は、

居之一歲、種之以穀、十歲、樹之以木、百歲、來之以德、

といって、一ヶ所に十年間住むつもりならば、樹木をうえなさいというごとく、樹木のもっている經濟力は重視されている。

たとえば同じく貨殖列傳に、千戸の封君と同じ位の年二十萬の利潤をあげるために、素封家といわれる事業家は都市郊外の耕地・山林・牧地・魚池の充分な活用を行えばよいといわれ、この中で山林には、「千章之材」⁽¹²⁹⁾をうえることをいつている。即ち、千本の大きな木をうえることによって年二十萬の利潤があげられるのである。このように山林のもっている經濟力の重要性については、増淵龍夫氏がすでにのべた如く、專制君主による山林藪澤の家産化による君主權力の經濟的基盤の確立という、中國古代國家成立の問題にかかわって來るのである。

四 おわりに

中國古代において木材がどのように利用されていたかを遺跡・遺物と文獻の兩面から検討してきた。資料不足と寡見によって意を充分につくし得たとは思わないが、大體の用途別木材を明らかにするとともに、簡單ではあるが、產地・流通・運搬法についてふれ、相當はなれたところからも水運を利用して運ばれたことをものべた。しかし山海經の各山の説明に必ず、その山の樹木の名前がしるされる如く、樹木に對する關心が非常につよく、經濟作物としての認識もあり、又、專制君主權力の經

濟的基盤としても重要視されて來た山林についての實際の經營がどのような姿をしていたのか。なぜ華北における山林荒廢に對する植林がなかったのか。何時頃から林業という山林の再生産が始まったのか等、いろいろな問題が今後に残されている。

(本研究は文部省昭和四十七年度科學研究費「漢代文物の考古學的研究」によるものである。)

註

- (1) ここでは樹木についてのべ、竹については、森鹿三氏の「竹と中國古代文化」(『東洋學研究 歷史地理篇』昭和四五年京都)にゆずる。
- (2) 浙江省文物管理委員會「吳興錢山漾遺址第一・二次發掘報告」『考古學報』一九六〇年二期八七頁。
- (3) 雲南省博物館籌備處「劍川海門口古文化遺址清理簡報」『考古通訊』一九五八年六期七頁。
- (4) 三輔黃圖卷二に「桂宮、漢武帝造、周回十餘里」とある。
- (5) 春秋左氏傳昭公三十五年。
- (6) 河南文物工作隊第一隊「鄭州市白家莊商代墓葬發掘簡報」『文物參考資料』一九五五年十期二六頁。
- (7) 江西木材工業研究所「長沙馬王堆一號漢墓棺槨木材的鑑定」『考古』一九七三年二期一二七—一二九頁。
- (8) 關野貞等『樂浪郡時代の遺跡—古蹟調査特別報告第四冊』朝鮮總督府、昭和二年。
- (9) 『昭和五年度古蹟調査報告第一冊』朝鮮總督府。
- (10) 小泉顯夫『樂浪彩篋塚』朝鮮古蹟研究會、昭和九年一五頁。
- (11) 小場恒吉・樫本龜次郎『樂浪王光墓』朝鮮古蹟研究會、昭和十年一九頁。
- (12) 林巳奈夫『中國殷周時代の武器』京都 昭和四七年 附論二「春秋戰國時代文化の基礎的編年」四九四頁による。
- (13) 郭寶鈞『山彪鎮與琉璃閣』北京 一九五九年五七・六九頁。
- (14) 湖南省博物館「長沙瀏城橋一號墓」『考古學報』一九七二年一期六〇頁。
- (15) 廣州市文物管理委員會「廣州黃花岡〇〇三號西漢木槨墓發掘簡報」『考古通訊』一九五八年四期三二頁。
- (16) 廣州市文物管理委員會「廣州南郊南石頭西漢木槨墓清理簡報」『文物參考資料』一九五五年八期八六頁。
- (17) 廣州市文物管理委員會「廣州市龍生岡四三號東漢木槨墓」『考古學報』一九五七年一期一四一頁。
- (18) 甘肅省博物館「甘肅武威磨咀子六號漢墓」『考古』一九六〇年五期一〇頁。
- (19) 甘肅省博物館「甘肅武威磨咀子漢墓發掘」『考古』一九六〇年九期一七頁。
- (20) 甘肅省博物館「武威磨咀子三座漢墓發掘簡報」『文物』一九七二年二期一一頁。
- (21) 嘉峪關市文物清理小組「嘉峪關漢畫像磚墓」『文物』一九七二年二期二八頁。
- (22) 文物工作報導「包頭市郊孟家梁清理漢墓十座」『文物參考資料』一九五六年八期七〇頁。
- (23) 青海省文物管理委員會「西寧市南灘漢墓」『考古』一九六四年五期二五六頁。
- (24) 前掲『樂浪彩篋塚』。
- (25) 黎瑤渤「遼寧北票縣官營子北燕馮素弗墓」『文物』一九七三年三期三頁。
- (26) 山西省大同市博物館・山西省文物工作委員會「山西大同石家寨北魏司馬金龍墓」『文物』一九七二年三期二二頁。
- (27) 林巳奈夫前掲書五四六頁による。

- (28) 中國科學院考古研究所『輝縣發掘報告』 北京 一九五六年七一頁。
- (29) 吳銘生「長沙市郊戰國墓與漢墓出土情況簡介」 『文物參考資料』 一九五六年四期二一頁。
- (30) 商承祚『長沙古物聞見記』 臺北 民國六〇年復刻版(原民國二八年版) 卷上五頁。
- (31) 湖南省文物管理委員會「長沙左家塘秦代木槨墓清理簡報」 『考古』 一九五九年九期四五六頁。
- (32) 林已奈夫前掲書六〇四頁による。
- (33) 四川省博物館『四川船棺葬發掘報告』 北京 一九六〇年一七頁。
- (34) 前掲書一九頁。
- (35) 前掲書二五頁。
- (36) 四川省文物管理委員會「成都洪家包西漢木槨墓清理簡報」 『考古通訊』 一九五七年三期一四頁。
- (37) 四川博物館「成都鳳凰山西漢木槨墓」 『考古』 一九五九年八期四一四頁。
- (38) 蘇北治淮文物工作組「揚州鳳凰河漢代木槨墓出土的漆器」 『文物參考資料』 一九五七年七期二〇頁。
- (39) 南京博物院「江蘇淮安青蓮崗古遺址古墓葬清理簡報」 『考古通訊』 一九五八年一〇期四九頁。
- (40) 南京博物院・揚州市博物館「江蘇揚州七里甸漢代木槨墓」 『考古』 一九六二年八期四〇〇頁。
- (41) 南京博物館「江蘇連雲港市海州網壘莊漢木槨墓」 『考古』 一九六三年六期二八七頁。
- (42) 江蘇省文物管理委員會・南京博物館「江蘇鹽城三羊墩漢墓清理報告」 『考古』 一九六四年八期三九三頁。
- (43) 南京博物院「江蘇儀徵石碑村漢代木槨墓」 『考古』 一九六六年一期一四頁。
- (44) 廣州市文物管理委員會「廣州南郊南石頭西漢木槨墓清理」 『文物參考資料』 一九五五年八期八五—八六頁。
- (45) 甘肅省博物館「甘肅武威磨咀子漢墓發掘」 『考古』 一九六〇年九期一七頁。
- (46) 內蒙古文物工作組「包頭市西郊漢墓清理簡報」 『文物參考資料』 一九五五年一〇期五九頁。
- (47) 湖南省博物館「長沙砂子塘西漢墓發掘簡報」 『文物參考資料』 一九六三年二期一三頁。
- (48) 陝西省文物管理委員會「陝西寶雞陽平鎮秦家溝村秦墓發掘記」 『考古』 一九六五年七期三三九頁。
- (49) 文物工作報導「安徽泗縣・毫縣發現骨器、石器及漢墓」 『文物參考資料』 一九五五年六期一二二頁、續とはいかなる木かは不明。
- (50) 朝鮮古蹟研究会「古蹟調査概報 樂浪古墳 昭和八年」 一四頁。
- (51) 朝鮮古蹟研究会「古蹟調査概報 樂浪古墳 昭和九年」 一六頁。
- (52) 『樂浪彩篋塚』。
- (53) 新疆維吾爾自治區博物館「新疆民豐縣北大沙漠中古遺址墓葬區東漢合葬墓清理簡報」 『文物參考資料』 一九六〇年六期九頁。
- (54) 內蒙古文物工作隊「內蒙古札賚諾爾古墓群發掘簡報」 『考古』 一九六一年二期六七九頁。
- (55) 禮記喪服大記の疏に「大夫柏椁者、以柏爲椁、不用黃腸、下天子也」とある。
- (56) 福永光司『莊子』 東京 昭和三十一年二〇五頁。
- (57) 後漢書卷三九王符傳引の潛夫論による。
- (58) 春秋左氏傳襄公二二年の杜預注に「棺用難朽之木、桐木易壞、不堪爲棺」とある。
- (59) 後漢書卷三四梁商傳の注にひかれた蘇林のことばに「漢書音義曰、以柏木黃心爲椁曰黃腸也」とあるによって、蘇林のことばは漢書音義によったことがわかる。
- (60) 漢書卷九三董賢傳、後漢書卷三三中山簡王焉傳にもみえる。
- (61) 楊樹達『漢代婚喪俗考』 上海 民國二十二年八六頁。
- (62) 夏鼎「新獲之敦煌漢簡」 『歷史語言研究所集刊』 一九 民國三七年。

- (63) スタインが敦煌で發見した簡は白楊木 (*Populus alba*) が一番多いといっている。Stein, A "Seriada" 1921. p. 598.
- (64) T'u-Hsiang Ho, 'The Woods of Ancient China I', *Gymnospermal. Quarterly Journal Taiwan Museum*, 14, 1948. p. 15~21.
- (65) 何天相「中國之古木」『中國考古學報』第五册、一九五一年。甘肅省博物館・中國科學院考古研究所『武威漢簡』北京 一九六四年五五頁。
- (66) 『樂浪彩篋塚』 五七頁。
- (67) 陳公柔・徐蘋芳「關於居延漢簡的發現和研究」『考古』一九六〇年一期四七頁。
- (68) 『武威漢簡』 五四頁。
- (69) 陳大章・賈巖「復制信陽楚墓出土木漆器模型的體會」『文物參考資料』一九五八年一期二四頁。
- (70) 中央音樂學院民族音樂研究所調查組「信陽戰國楚墓出土樂器初步調查記」『文物參考資料』一九五八年一期一七頁。
- (71) 白川靜『詩經研究 通論篇』京都 昭和三五年一二六五頁。
- (72) 詩經鄭風將仲子傳。
- (73) 太平御覽卷五八二に引かれた荊州記は「桂」であるが、初學記卷一六の引では「山」になっている。
- (74) 何天相 前掲書。
- (75) 郭寶鈞『濬縣辛村』北京 一九六四年七〇頁。
- (76) 青海省文物管理委員會・中學科學院考古研究所青海隊「青海都蘭縣諾木洪塔里他里哈遺址調查與試掘」『考古學報』一九六三年一期四二頁。
- (77) 『樂浪彩篋塚』 六二頁。
- (78) 倪振達「淹城出土的銅器」『文物』一九五九年四期五頁。
- (79) 注(2)。
- (80) 周禮正義卷七五「(孫) 詒讓案 齊民要術云、挾榆可以爲車轂、雜榆疑即挾榆」。
- (81) 佐藤武敏「中國古代工業史の研究」東京 昭和三七年、九三頁。
- (82) 王子年拾遺記にも同じ文がみえるが、これは卷六前漢下にある。
- (83) 『四川船棺葬發掘報告』 八八頁。
- (84) 佐藤武敏 前掲書 三〇〇—三〇七頁。
- (85) 前掲書 三〇六頁。
- (86) 何天相 前掲書(二) 二八一—二八二頁。
- (87) 『四川船棺葬發掘報告』 七九頁。
- (88) 商承祚 前掲書 卷上一六頁。
- (89) 『考古』一九六四年八期三九七—三九八頁、四〇一頁。
- (90) 『四川船棺葬發掘報告』 七九頁。
- (91) 『樂浪彩篋塚』 六四・六一・六〇頁。
- (92) 前掲書 六三一—六四頁。
- (93) 『樂浪王光墓』 四七頁。
- (94) 黃文弼「羅布淖爾考古記」北京 民國三七年一五一—一五二頁。
- (95) Stein, A. *ibid.* Pl. LII.
- (96) Bergman, F., 'Lou-Lan Wood-carvings and Small Finds Discovered by Sven Hedin', *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities* 7, 1935. p. 79.
- (97) Bergman, F. *ibid.* p. 138.
- (98) 『考古』一九六一年二期六七九頁。
- (99) 『文物』一九七三年三期八頁。
- (100) 王文臺輯『七家後漢書』による。
- (101) 廣島大學文學部中國哲學研究室『儀禮國譯 第七集—喪服』廣島 昭和四六年六九頁。
- (102) 太平御覽卷九五九引の草木疏では「牛宮箱」となっている。
- (103) 林巳奈夫 前掲書。
- (104) 何天相 前掲書(二)、二八〇頁。

なお、大阪府立大學農學部教授中尾佐助氏に筆者が直接聞いたところ、何天相の鑑定の結果は餘りにも珍木すぎるくらいがあるので、

信用度がうすれるのではないかということであった。

(105) 林已奈夫 前掲書 四一頁。

(106) 何天相 前掲書(一) 二七〇頁。

(107) 前掲書 二八二—二八三頁。

(108) 前掲書 二四九—二五一頁。

(109) 前掲書 二八四—二八六頁。

(110) 郭寶鈞 前掲書 七〇頁。

(111) 林已奈夫 前掲書 五一七頁。

(112) 何天相 前掲書(一) 二六八—二七〇頁。

(113) 前掲書 二七七頁。

(114) 前掲書 二七二—二七三頁。

(115) 『考古學報』 一九七二年一期六四—六五頁。

(116) 湖南省博物館「湖南常德德山楚墓發掘報告」 『考古』 一九六三年九期四六七頁。

(117) 中國科學院考古研究所『長沙發掘報告』 北京 一九五七年四七頁。

(118) 林已奈夫 前掲書 三四六頁。

(119) 木材の種類については、陳麟『中國樹木分類學』 上海、一九五九年。賈祖璋 賈祖璋『中國植物圖鑑』 上海 民國二十六年等を参考にした。日本名は牧野富太郎『牧野新日本植物圖鑑』東京、昭和三年を参照した。

(120) 張其的等『中華民國地圖集第五冊・中華民國總圖』 臺北 民國五十六年の自然植物分布圖、森林分布圖等を参照。

(121) 竺可楨『中國近五千年來氣候變遷的初步研究』 『考古學報』 一九七二年一期一五—二二頁。

(122) 後漢書卷四四楊彪傳に「(董)卓曰、關中肥饒、故秦得并吞六國、且隴石材木自出致之甚易」とある。

(123) 漢代の蜀郡には木官がおかれていたことが、漢書卷二八上地理志八上の蜀郡嚴道縣の條にみえる。

(124) 河北省定縣北莊で調査された漢墓が、中山簡王焉の墓に比定されている。河北省文化局文物工作隊「河北定縣北莊漢墓發掘報告」

『考古學報』 一九六四年二期一二七—一九四頁。

(125) 史記卷六秦始皇本紀の始皇帝二十八年の條に、帝が行幸中に湘山祠で大風に逢って江をわたり得なかった時、博士に湘君とはなんの神かと問い、堯の女・舜の妻で湘山に葬られたと答えを聞き、帝は江をわたり得なかった原因をこの湘神にして、「於是始皇大怒、使刑徒三千人、皆伐湘山樹、赭其山」にしてしまったとみえる。このようすはまさしく濫伐である。

(126) 史記卷一九孫叔敖傳によると、「秋冬則勸民山採、春夏以水、各得其所便」とあって、集解には徐廣をひいて「乘多水時、而出材竹」といっている。これによると秋冬に伐採した材木を春夏の水の多い時に川に流していたことがうかがわれる。

(127) 莊子卷二人間世、「匠石之齊、至乎曲轅、見櫟社樹、其大蔽牛、絮之百圍、其高臨山、十仞而後有枝、其可以爲舟者、旁十數、觀者如市、匠伯不顧、遂行不輟、弟子厭觀之、走及匠石、曰、自吾執斧斤、以隨夫子、未嘗材如此其見美也、……」

(128) 漢書卷二二平帝紀「(元始元年)、天下女徒、已論歸家、顧山錢、月三百」の應劭注に「舊刑鬼薪、取薪於山、以給宗廟、今使女徒、出錢顧薪、故曰顧山」とある。

(129) 宇都宮清吉『漢代社會經濟史研究』 東京 昭和三十年、第三章西漢時代の都市、第五章 史記貨殖列傳研究。

(130) 增淵龍夫『中國古代の社會と國家』 東京 昭和三十五年 第三篇第一章 先秦時代の山林藪澤と秦の公田。

(補記) 甘肅省武威縣旱灘坡にある後漢初期の土洞墓から、柏材の木棺と松材と楊材とでつくられた醫藥不簡・木牘が出土した。(甘肅省博物館甘肅省武威縣文化館「武威旱灘坡漢墓發掘簡報」出土大批醫藥簡牘「文物」一九七三年二期一八一—一九頁)